

祖堂集卷第十八 江西下卷第五曹溪四五代法孫

趙州和尚、南泉に嗣ぐ、北地に在り、師諱は全諱。青社、繼丘の人なり。少にして本州龍興寺において出家し、嵩山琉璃壇に受戒す。經律を味たじまず、遍く叢林に参じ、一たび南泉に造つて他往無し。既に盛筵に遭えば、寧ぞ扣擊無からんや。

師問つ、如何なるか是れ道。南泉云く、平常心是れ道。師云く、還た趣向すべきや。南泉云く、擬すれば則ち乖く。師云く、擬せざる時如何が是れ道なることを知らん。南泉云く、道は知と不知とに属せず。知は是れ妄覺、不知は是れ無記なり。若し真に不擬の道に達せば、猶お大虚の廓然として蕩豁するが如し。豈に是非すべけんや。師は是において頓に玄機を領し、心は朗月の如し。介れより、縁に随性に任せ、浮生を笑傲し、毳を擁し筇を携え、煙水を周遊す。

師がたずねる、どのようなのが道でしょうか。南泉が云つ、平常心が道だ。師が云つ、趣くことができますか。南泉が云つ、そうしようとすれば乖いてしまう。師が云つ、そうしようとしないなら、どうして是れが道だと知れますか。南泉が云つ、道は知とか不知とかに属さない。知は妄覺だし、不知は無記だ。もし本当に不擬の道に到達したなら、大虚のようからりとして何も無い。どうして是非できよう。師はそこですぐに玄機を領し、心は明るい月のようであった。それより縁にしたがつて思いのままに、浮世を笑いとばしながら、毳衣をつけ、杖をたずさえて山水を周遊した。

・平常心是れ道 あたりまえの心が道である。元来は馬祖の語

師、座主に問う、所業は何ぞ。對えて云く、維摩經を講ぜり。師云く、維摩は還た祖父有りや。對えて云く、有り。師云く、阿那个か是れ維摩の祖父。對えて云く、則ち某甲便ち是れ。師云く、既に是れ祖父ならば、何ぞと為てか却つて兒孫の為に傳語するや。座主無對。

・阿那个是 原文「阿那是」とあり、个を補つ。

・既に是れ云 お前が維摩の祖父なら孫の維摩の教えを伝えるのはおかしい。

問う、學人、作佛し去らんと擬する時如何ん。師云く、心力を費やす。僧云く、心力を費やさざる時如何。師云く、作佛し去る。

・費心力、ご苦労だな、むだなことだの意。

問う、夜は兜率に昇り、晝は閻浮に降る。其中の摩尼什摩と為てか現ぜざる。師云く、什摩と道いしや。僧再び問う。師云く、道つを見ずや、毗婆尸佛は早く心を留むるも、直に如今に至るまで妙を得ず、と。

有る僧辞す、什摩いすれの處にか去く。對えて云く、南方に去く。師云く、三千里外人に逢つも喜ぶこと莫れ。僧云く、學人不會。師云く、柳絮柳絮。

・柳絮 柳の綿毛。軽くて空に無う。子供はそれを取ろうと追いかけて遊ぶ。

第一座に問う、堂中還た祖父有りや。對えて云く、有り。師云く、喚び来つて老僧の与に洗脚せしめよ。

・祖父 聖僧文殊を指すか、達磨をいうか。

・与老僧洗脚 臨濟録「趙州行脚時參師、遇師洗脚次、州便問、如何是祖師西來意。師云、恰值老僧洗脚。州近前、作聽勢。師云、更要第二杓惡水潑在。州便下去」の問答を前提とする。

師、衆に示して云く、我が這裏は亦た在窟の師子有り。亦た出窟の師子有り。只だ是れ師子兒無し。僧有り出で来たつて彈指する

こと両三下す。師云く、什摩をか作す。僧云く、獅子兒なり。師云く、我れ喚んで師子と作すすら早是に罪過なるに、徐は又た更に蹴踏して什摩をか作す。

師は衆に示して云った、わしのところは、在窟の獅子もいれば、出窟の獅子もいる。ただ獅子の兒がいいただけだ。ある僧が出て来て、彈指両三下した。師が云う、どうしたというのだ。僧が云う、獅子の兒です。師が云う、わしが獅子と名づけるのすらすでに罪つくりなのに、お前さん足ふみならしてどうしたというのだ。

・ 蹴踏 獅子兒のつもりで足ふみならしているところをいう。

問う、与摩に来たる底の人、師還た接するや。師云く、接す。与摩に来たらざる底の人、師還た接するや。師云く、接す。僧云く、与摩に来たる底の人は、師の接するに従せん。与摩に来たらざる底の人、師は如何んが接する。師云く、止みね止みね、説くを須いず。我が法は妙にして思うこと難し。

問う、そのようにやってくる修行僧を、師は迎えとられますか。師が云う、迎えとる。そのようにやっこない修行者を師は迎えとられますか。師が云う、迎えとる。僧が云う、そのようにやっこくる修行僧はおいておきましよう、そのようにやっこ来て来ない修行者はどのように迎えとられますか。師が云う、止みね止みね、説くを須いず。我が法は妙にして思うこと難し。

・ 止止以下 法華經方便品の句。相手に判断停止を命じたもの。

問う、如何なるか是れ平常心。師云く、虎狼野干是なり。僧云く、還た教化するや。師云く、徐が門戸を歴せず。僧云く、与摩ならば那个の人を平沈すること莫きや。師云く、ただ好し平常心なるに。

問う、何が平常心でしょうか。師が云う、虎狼野干がそうだ。僧が云う、教化するのですか。師が云う、お前さんのところは寄らないよ。僧が云う、それでは那个の人を駄目にするではありませんか。師が云う、それでこそ平常心というものだ。

・この問答に該当するものが趙州録にも見られるが、二つの別の問答に分かれている。「問、如何是平常心、師云、狐狼野干是」
 「問、平常心底人、還受教化也無。師云、我不歷他門戶。學云、與麼則莫沈却那边人麼。師云、大好平常心」。

大王師を礼拝す。師、床を下らず。侍者問う、大王来たれり。師、什麼と為てか地に下らざる。師云く、汝等會せず、上等の人来たらば繩床に上りて接し、中等の人来たらば繩床を下りて接し、下等の人来たらば三門外に接することを。

師、座主に問う、久しく什摩の業を纏むや。對えて云く、涅槃經。師云く、座主に一段の義を問わん、得たりや。對えて云く、得たり。師、脚を以て剔し空中に口吹して却つて問う、這個は是れ涅槃經中の義なりや。云く、是なり。師云く、會するや。不會。師云く、這個は是れ五百力士結成するの義なり。

・五百力士結成之義 涅槃經三十三に見える話しにもとづく。結成というのは、三十万の力士が、積尊が三月後に涅槃される
 と聞いて「相與集聚、平治道路」したことをさすようである。

師、衆に示して云く、我れ三十年前、南方に在り、火炉頭に無實主の話を拳せしに、直に如今に至るまで、人の道著する無し。人有つて拳して雪峯に問えり、趙州無實主の話、作摩生か道わん。峯便ち踏倒す。

師は衆に示して云つた、わしは三十年前、南方にいて、いろいろ端で無實主の話を拳したが、ずっといままで道いあてたものはない。あるものがこの話しを雪峯に問つた。趙州和尚の無實主の話ですが、どのようにいわれますか。すると雪峯は踏み倒した。

師、又た一老宿の處に到る。老宿云く、老大の人、何ぞ住處を見取せざる。師云く、什摩の處か是れ某甲が住處なる。老宿云く、老大の人、住處も也た識らず。師云く、三十年騎馬を學んで、今日驢の撲することを被れり。

師はあるとき一老宿のところへやって来た。老宿が云つ、いい年をしてどうして落ち着き先をちゃんと探さないのだ。師が云つ、どこがわたしの落ち着き先だろう。老宿が云つ、いい年をして、落ち着き先もわからんとは。師が云つ、三十年騎馬を習つて、今日は驢馬なんぞに投げだされたわい。

・伝灯録十葉菓の伝によれば、老宿は菜菓である。龐居士語録の「居士一日見牧童、乃問、路從什麼処去。童曰、路也不識。士曰、這着牛兒。童曰、這畜生。士曰、今日什麼時也。童曰、挿田時也。士大笑」という一段を参照。

問う、教を離れて、請う師決せよ。師云く、与摩の人ならば則ち得たり。僧纔かに礼拝するや師云く、問うに好し、問うに好し。僧云く、和尚に諮す。師云く、今日荅話せず。

問う、澄澄として點を絶する時如何ん。師云く、我が此間すかんに這この客作の漢がを著おかず。

・客作漢 やとわれ小作。

問う、如何なるか是れ和尚の家風。師云く、你に向かつて道わず。僧云く、什摩と為してか道わざる。師云く、是れ我が家風なり。

問う、如何んが國王の恩に報ゆることを得ん。師云く、念佛せよ。僧云く、街頭の貧兒すら也た念佛す。師は一個の錢を拈じて与よつ。

問う、如何なるか是れ本分の事。師、學人を指して云く、是れ汝が本分の事なり。僧云く、如何なるか是れ和尚の本分の事。師云く、是れ我が本分の事なり。

・是侂本分事 ほかならぬお前の本分の事だ。

問う、如何なるか是れ佛向上の事。師云く、我れは侂が脚底に在り。僧云く、師は什麼と為てか學人が脚底に在る。師云く、侂の佛向上の事有ることを知らざるが為めなり。

問う、如何なるか是れ密室中の人。師、展手して云く、茶塩錢、布施せよ。人有り、雲居に問う、趙州与摩に道う、意作摩生。雲居云く、八十の老公場屋を出づ。

・八十老公出場屋 伝灯録卷十七雲居の伝に「八十老人出場屋、不是小兒戯」とあるのを参照。

問う、栢樹子に還た佛性有りや。師云く、有り。僧云く、幾時にか成佛する。師云く、虚空の地に落つるを待つ。僧云く、虚空は幾時にか地に落つ。師云く、栢樹の成佛するを待つ。

問う、栢樹子に佛性がありますか。師が云う、有る。僧が云う、いつ成佛しますか。師が云う、天空が地に落ちが時だ。僧が云う、いつ地に落ちますか。師が云う、栢樹子が成佛した時だ。

・此の一段、佛性と成佛との断絶に問題がある。佛性が成佛の可能性としてあるものではないことを示したものの。

・虚空落地 天地崩壊すること。ありえないことを云ったもの。兎角龜毛と云うのと同じ。

新到、座具を展ぶる次で、師問う、近離何れの方ぞ。僧云く、方面無し。師起ちて僧の背後に向かつて立つ。僧、座具を把りて起つ。師云く、太だ好し、無方面なる。

新參の僧が座具を敷いた時、師が問う、どの方面から来たか。僧が云う、方面なんてありません。師は起ちあがつて僧の背後に

立つ。僧は座具を持って起ちあがる。師が云つ、見事に方面がないな。

・趙州録は「問新到、従何方来。云、無方面来。師乃転背。僧将坐具随師転。師云、大好無方面」。

僧、辞する次いで、師問う、外方に人有りて、還た趙州に見えしやと問わば、作摩生かかれ他に向かつて道わん。僧云く、只だ和尚に見えたりと道うのみ。師云く、老僧は一頭の驢に似たり。汝は、作摩生か見えん。僧無對。

僧が行脚に出掛けようとした時、師が問う、よそである人が、趙州にお目にかかったかとなすねたら、どのように彼に云つかな。僧が云う、和尚にお目にかかったと云うだけです。師が云う、老僧は一頭の驢馬にそっくりだ。お前はどの様にお目にかかるかな。僧は答えない。

・似一頭驢 驢馬そのものだという語気。

師、新到に問う、近離什摩の處ぞ。云く、近ごろ南方を離る。師云く、什摩人をか伴子と為す。僧云く、畜生を伴子と為す。師云く、好个の閻梨、什摩と為てか却つて畜生と伴子と作る。僧云く、異り無きが故なり。師云く、太だ好し、畜生。僧云く、争か肯わん。師云く、肯わざることとは則ち一任す。我に伴子を還し来たれ。僧無對。

師が新參の僧に問う、ちかごろどこに居られたのか。云う、南方に居りました。師が云う、どんな人が連れだ。僧が云う、畜生が連れです。師が云う、立派な僧がどうして畜生なんかと連れになったのだ。僧が云う、私とちがいなどないからです。師が云う、見事な畜生だ。僧が云う、それはいただけませんな。師が云う、ただけないというのなら、お前の好きな様に。わしにその連れをつれてきて見せてくれ。僧は答えない。

・太好畜生 僧をも含めて言つたところ。

僧有り、纔に礼拝するや、師云く、珍重。僧申問す。師云く、又た是れなり、又た是れなり。

ある僧が、おじぎをしたとたん、師が言つ、ご苦労さんでした。僧が質問する。師が言つ、またか、またか。

・又是也又是也　またしてもかという意。また例のやつかという語気。

問う、学人南方に去く。忽然雪峯の趙州の意を問わば、作摩生か祇對せん。師云く、冬に遇わば則ち寒く、夏に遇わば則ち熱し。進んで曰く、究竟じて趙州の意旨如何ん。師云く、親しく趙州より来たる、是れ傳語人ならず。其の僧、雪峯に到る。果たして、問つ所の如し。其の僧、一一上の如くに拳對す。雪峯曰く、君子は千里同風。

問う、私は南方に参ります。もし雪峯が趙州の意旨をたずねたら、どのようにお答えしましょうか。師が言つ、冬がくれば寒く、夏がくれば暑い。進んでいふ、結局趙州の意旨はどうなんですか。師が言つ、直々に趙州からやってきました。「意旨を」受け売りする者ではございません。其の僧が雪峯にやってくると、果たして問われた通りだった。その僧は一つ一つ先の様に答える。雪峯が云つ、君子は千里を距ても同じおもむき。

・遇冬云　師が答話を示した処。

・究竟趙州云　つまるところ趙州の意旨はどうなんですかと尋ねられたら、どう答えましょうか。

・君子千里同風　伝灯録卷十八玄沙の章では、玄沙の書簡が端著となっている。「師一日遣僧送書、上雪峯和尚。雪峯開緘、唯白紙三幅。問僧、會麼。曰、不會。峯曰、不見道、君子千里同風」。

問う、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、亭前の栢樹子。僧云く、和尚、境を將もつて人に示すこと莫かれ。師云く、我は境を將つて人に示さず。僧云く、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、亭前の栢樹子。

問う、どういふのが、祖師西来の意でしょうか。師が云う、亭前の栢樹子だ。僧が云う、和尚さん、境でお示しにならないで下

さい。師が云う、わしは境で示してはいない。僧が云う、どういうところが祖師西來の意でしようか。師が云う、亭前の栢樹子だ。

・此の一段、無門関第三十七則に「趙州因僧問、如何是祖師西來意。州云、庭前栢樹子」とある。

・莫將境示人 境とは、本質ではなくて可視的な現象にすぎぬもの。

問う、如何なるか是れ學人の師。師云く、雲に山を出づるの勢い有り、水に澗に投ずるの聲無し。僧云く、這を問わず。師云く、是れ汝が師なるに問わず。

問う、私の師はどのような人ですか。師がいう、雲は山を出ようとし、水は澗に落ちる音をたてない。僧が云う、それを問うているではありません。師がいう、これこそお前の師であるのに問わないのか。

・雲有_云 湧き上がらんとする雲。音もなく流れるあふれんばかりの澗の水という自然の情景を述べて、學人の師を示した。

問う、頭頭這裏に到る時如何ん、師云く、猶お老僧と較ぶること一百歩。

問う、一一つがここに到達するといつのはどうでしょう。師が云う、私の境地と較べると二百歩も隔っている。

・猶較老僧一百歩 私の境地と較べると、ずいぶん隔たりがある。這裏に到るといふことをはねつけている処。

問う、方圓就らざる時如何。師云く、方ならず、圓ならず。云く、与摩なる時、作摩生。師云く、是れ方、是れ圓。

問う、方と円がまだ出来上がっていないといつのはいかがでしょう。師が云う、四角くもなく、円くもない。云う、そのようなときはどうなりましょう。師が云う、四角くもあり、円くもある。

・与摩時 師の答の不方不圓を承けて与摩と言ったもの。

・是方は圓 不方不圓がそのまま方でもあり圓でもある。また、お前の言つ与摩は方か円か、とも考えられる。

師、有る時云く、佛の一字、吾れ聞くを喜このまず。僧問う、師は還た人の為にするや。師云く、佛なり佛なり。

師がある時云う、仏という一字は、わしは聞くのもいやだ。僧が問う、師はいつたい人の為に教えられますか。師が云う、仏だ、
仏だ。

・佛之一字云 伝灯録卷十四丹霞の章、「佛之一字、永不喜聞」

・為人 為人ということが仏の仕事であるという前提に立つ。

・佛也佛也 僧の問に対して、吐き棄てる語気。

問う、一燈、百千の燈を燃す、と。未いぶか審し、一燈は是れ什摩ぞ。師、隻履を跳出す。又た云く、若も是し作家ならば与摩に問わず。

問う、一つの灯が百千の灯を燃すといいますが、いつたい一つの灯とはどんなものですか。師は片方の靴をけり投げる。また云う、もしやり手の僧ならそんな問い方はしないもんだ。

・一燈燃百千燈 維摩經菩薩品の句。同じ一灯が広がるということ。いくら別れても、もともと同じ一灯である。

問う、如何なるか是れ本来人。師云く、老僧を識得してより後、只だこの漢、更に別無し。僧云く、与摩ならば則ち和尚と生を隔つ。師云く、但だ今生のみに非ず、千生万生も也た老僧を知らず。

問う、どういふものが本来人ですか。師が云う、わしと知り合いになって以後は他ならぬそいつは更に別人ではない。僧が云う、そいつのことなら、そいつは和尚さんとは別な生涯の人になりはしませんか。師が云う、ただこの一生だけでなく千生にも万生にもわしを知らんのだ。

・本来人 趙州録は「本来身」。

・非但今生千生万生 原文は、「非但千生与万生」。趙州録により改む。

師、滄山に問う、如何なるか是れ祖師意。滄山、侍者を喚んで床子を將まち来たらしむ。師云く、住してより已来、未だ嘗て一个の本色の禪師に遇著せず。時に人有つて問う、忽もし遇う時は如何ん。師云く、千鈞の弩は奚鼠の爲にして機を發せず。

師が滄山に問う、どういふのが祖師の意ですか。滄山は侍者を呼んでいすを持って来させた。師は云う、この山に住していらい、まだほんもの禪師に出会ったことがない。その時ある人が問う、もし出会われた時はいかがですか。師が云う、千鈞の石弓は、ねずみを射つためじゃない。

・滄山とのやりとりは師の行脚時代のこと、住山後のある時、滄山をたたえたものであろう。

・千鈞之弩 魏書二十三杜襲の伝、襲曰、夫惟賢知賢、惟聖知聖。凡人安能知非凡人邪。方今豺狼當路而狐狸是先、人將謂殿下避彊攻弱、進不為勇、退不為仁。臣聞千鈞之弩不為鼠發機、萬石之鐘不以莛撞起音。今區區之許攸、何足以勞神武哉」。

人有つて問う、諸佛に還また師有りや。師云く、有り。僧進んで曰く、如何なるか是れ諸佛の師。師云く、阿弥陀佛。又た云く、佛は是れ弟子。

僧有り、長慶に問う、趙州与摩に阿弥陀佛と道う。是れ善いう底の語が、是れ嗟する底の語が。長慶云く、若し両頭に向かつて會すれば盡く趙州の意を見ざらん。僧進んで云く、趙州は、意作摩生。長慶便ち彈指すること一聲。

ある人が問う、諸仏に師がありますか。師が云う、ある。僧は進んで云う、どのようなのが諸仏の師ですか。師が云う、アミダブツ。また云う、仏は弟子である。

ある僧が長慶に問う、趙州和尚があのように「アミダブツ」といったのは、陳べた語でしょうか、称えた語でしょうか。長慶が云う、両面にわかるうとすれば、すべて趙州の意を見ないだろう。僧が進んで云う、趙州はどういうつもりですか。長慶は指を

パチリと鳴らす。

鎮州大王、師に上堂せんことを請う。師、昇座しんぞして便ち念経す。人有つて問う、和尚に請うて上堂せしめしに、什摩に因りてか念経する。師云く、佛弟子念経す、得ざるや。

鎮州大王が、師に上堂されんことを願うた。師は昇座するや経を念じた。ある人が問う、和尚さんに上堂してもらったのに、どうして経を念じるのですか。師がいう、佛弟子が経を念ずる、いけないか。

又た、別時に上堂す。師、心経を念ず。人有つて云く、経を念じて什摩をか作なす。師云く、頼さいわいに闇梨が経を念ずと道うを得たり。老僧泊んど忘却せんすとす。

また別の上堂の時、師は心経を念じた。ある人がいう、経を念じてどうしたのですか。師が云う、お前さん、経を念ずるといつてくれてよかった。わしはあやうく気づかずじまいになるところだった。

問う、如何なるか是れ玄中の又た玄。師云く、那个の師僧、若し在らば今年七十四ならん。

問う、玄中のまた玄というのはどういふものですか。師が云う、あのお坊さん、生きてられたら今年七十四だ。

問う、如何なるか是れ玄中の一句。師云く、是れ如是我聞ならずや。

問う、どのようなのが玄中の一句ですか。師が云う、如是我聞じゃないのか。

問う、寸糸も掛けざる時如何ん。師云く、什摩をか掛けざる。僧云く、寸糸を掛けず。師云く、太いに好し、掛けざる。

問う、寸糸も掛けない時、いかがですか。師が云う、なにを掛けないって。僧が云う、寸糸を掛けないのです。師が云う、大変結構な掛けないだ。

問う、迦葉が上行衣、什摩人が合に被することを得べき。師云く、七佛虚しく出世し、道人都て知らず。

問う、迦葉尊者の上行衣は、誰が身につけるべきでしょう。師が云う、七仏はむなく世に出て、道人は決して知らない。

・上行衣というのはどういふものか良く解らない。

師、僧に問う、還た曾つて這裏に到りしや。云く、曾つて這裏に到れり。師云く、喫茶し去れ。

師が僧に問う、ここに来たことがあるか。云く、来たことがあります。師が云う、お茶のんでこい。

師云く、還た曾つて這裏に到りしや。對えて云く、曾つて這裏に到らず。師云く、喫茶し去れ。

又、僧に問う、還た曾つて這裏に到りしや。對えて云く、和尚問うて什摩をか作す。師云く、喫茶し去れ。

・右の三段、まとめて、趙州録に次のようにあるのを参照、「師問二新到、上座曾到此問否。云、不曾到。師云、喫茶去。又問那一人、曾到此問否。云、曾到。師云、喫茶去。院主問、和尚、不曾到、教伊喫茶去、即且置。曾到、為什摩教伊喫茶去。師云、院主。院主應諾。師云、喫茶去」

師、僧に問う、你、這裏に在りて幾年をか得たる。對えて云く、五六年。師云く、還た老僧を見しや。對えて云く、見たり。師云く、見ること何似生。對えて云く、一頭の驢に似たり。師云く、什摩の處に一頭の驢に似たるを見しや。對えて云く、法界に入りて

見たり。師云く、去れ、未だ老僧を見ず。

人有つて洞山に拳似す。洞山代わつて云く、水を喫し草を喫す。

師が僧に問う、お前さんここに来て何年になる。答えて云う、五六年です。師が云う、わしを見たか。答えて云う、見ました。師が云う、見てどうだ。答えて云う、驢馬そっくりです。師が云う、どこで驢馬そっくりなのを見たか。答えて云う、法界に入つて見ました。師が云う、行け、まだわしを見とらん。

ある人がこの話を洞山にする。洞山は僧に代わつて云う、水を喫し草を喫す。

・卷十六南泉の伝に「又問、従凡入聖則不問、従聖入凡時如何。曹山云、成得个一頭水牯牛。如何是水牯牛。曹山云、朦朦瞳瞳地。僧云、此意如何。曹山云、但念水草、餘無所知。僧云、成得个什摩边事。曹山云、只是逢水喫水、逢草喫草」とあるのを参照。

問う、朗月、空に處する時、人盡く委す。未審し室内の事如何ん。師云く、少きより出家せるも活計を作さず。學曰く、与摩ならば則ち今時の為にせず去るなり。師云く、老僧自疾すら救う能わず。争でか能く諸人の疾を救い得ん。學曰く、与摩ならば則ち来者は依無けん。師云く、依るときは則ち地を榻著せよ。依らざるときは則ち一に東西するに任す。

問う、朗月が空にあるときは人はみな知ります。ところで室内の事はいかがでしょうか。師云く、若いときから出家しているけれども、稼業はしていない。学人が云う、そういうことならわれわれ修行者のためにしないことになりましたね。師が云う、自分の疾さえなおすことができるのだ。どうして修行者の疾が救えようか。学人が云う、そういうことなら来る者にたよりがありません。師が云う、たよるときは大地を踏みつけよ、たよらないときはどこに行こうと勝手だ。

・自疾不能_云 維摩經弟子品に「我阿難言居士、世尊身小有疾、當用牛乳、故来至此。維摩詰言、止止阿難、莫作是語。 . . .

外道梵志若聞此語、當作是念、何名為師、自疾不能救、而能救諸疾人。可密速去、勿使人聞」とあるのに基づくものである。
・榻著地 趙州録に従つて踏著地に改める。

師、僧に問う、什摩いずれの處より來たるや。對えて云く、五臺山より來たれり。師云く、還かへた文殊を見しや。對えて云く、文殊は則ち見ず、只だ一頭の水牯牛を見たり。師云く、水牯牛還た語有りしや。對えて云く、有り。師曰く、什摩と道いしぞ。對えて云く、孟春猶お寒し、伏して惟るに和尚は尊躰起居万福。

師が僧に問う、どこから來たか。答えて云う、五台山から來ました。師が云う、文殊さんに會つたか。答えて云う、文殊さんには會いませんでした。一頭の水牯牛に會つただけです。師が云う、水牯牛は何か云つたか。答えて云う、はい。師が云う、どう云つたか。答えて云う、春とはいえまだ寒うございます。和尚は尊體、御機嫌つるわしく拝察申し上げます。

・孟春猶寒 時候の挨拶のきまり文句。

師、一日有つて、七歳の兒子に向かつて云く、老僧盡日來、心造、你と相い共に論義せんとす。你若し輸すれば則ち餠餅を買いて老僧に与えよ。老僧若し輸すれば則ち老僧餠餅を買いて你に与えん。兒子云く、請う師、立義せよ。師云く、劣を以て宗と為す。勝を争つことを得ざれ。老僧は是れ一頭の驢。兒子云く、某甲は是れ驢糞。師云く、是れ你、我が与に餠餅を買え。兒子云く、得ず。和尚、和尚須く某甲の与に餠餅を買いて始めて得べし。師、弟子と相争いて断じ得ず。師云く、者个の事、軍國の事と一般なり。官家若し判じ得ざれば須く村公を喚びて断ぜしむべし。這裏に三百來の衆有り、中に於いて人無かる可からず。大衆、老僧が与に寶主を断ぜよ。一家阿那个か是れ路有るや。大衆断じ得ず。師云く、須く是れ具眼の禪師にして始めて得べし。三日以後、沙弥覺察し、餠餅を買いて和尚に供養せり。

師はある日、七歳の童兒に向かつて云つた、わしは日がな一日心造してお前と議論がしたい。お前が負けたらモチを買つてわし

にくれるのだよ。わしが負けたらわしがモチを買ってお前にやろう。

童児が云つ、じゃあ和尚さん題を出して下さい。

師が云つ、負けるが勝ちとしよう、勝とうとしてはいけないよ。わしは一匹のロバだ。

童児が云つ、わたしはロバの糞です。

師が云つ、そら、お前がわしにモチを買うのだぞ。

童児が云つ、それはありません。和尚さん、和尚さんがわたしにモチを買って下さらなくてはいけません。

師は弟子と相い争ってきまりをつけ得なかった。

師が云つ、これは一国の問題と同じだ。官吏にもきまりがつけられなければ、村の衆を呼んできまりをつけさせねばならない。

ここには三百人からの修行者がいる。中にしかるべき者がいないはずがない。大衆よ、わしのために黒白つけてくれ。わしらのうちどちらに勝ち目があるのかな。

大衆はきまりをつけ得なかった。

師が云つ、具眼の禅師でなければならん。

三日ののち、沙弥ははつと気づいて、モチを買って和尚に供養した。

・心造 卷十長慶の伝にも見えるが、意味はよくわからない。気の滅入ったような状態が、気づかれていることが。

・立義 豎義に同じ。法論においてまず題を立てること。

・以劣為宗不得諍勝といつところに趙州和尚の仕掛けたわながあった。

古時、官長有り。僧をして拜せしむ。馬祖下の朗端和尚、拜することを肯わず。官長便ち嗔りて當時に打殺す。人有つて師に問つ、端和尚は何摩と為てか却つて打殺せらるる。師云く、伊が命を惜しみが為なり。龍花拈じて僧に問う、个の什摩の命をか惜しむ。對

無し。龍花代わつて云く、我を嗔り得ず。問う、正与摩の時、作摩生。師云く、生公死を忍ぶこと十年、老僧一時に過ぐ可からず。むかし、役人の長がいて、僧に自分を礼拝させた。馬祖門下の朗端和尚だけは、それを拒否したので、役人の長は怒ってすぐに打ち殺した。ある人が、師にたずねる、端和尚はどうして打ち殺されたのですか。師が云う、彼が命を惜しんだからだ。龍花がとりあげて僧にたずねた、どういふ命を惜しんだのですか。答えがない。龍花が代わつて答える、わたしに腹をたててはいかんぞ。問う、ちょうどそついう場合はどうですか。師が云う、道生和尚は死に耐えること十年であつたが、わしはおいそれとまざることはできない。

・ 嗔我不得 龍花が官長になり代わつて答えた所。

・ 正与摩時 礼拝をして生き恥をかくところを云つたもの。

・ 生公云 竺道生、梁伝巻七。一乗要決上に道生を忍死菩薩としているが典拠は不詳。六巻泥洹經により、闍提成仏を主張し排斥せられたが、後に大本の涅槃經が伝えられ、所説が証明されたといつところを指したもの。朗端を讚えた処。不惜身命をもう一步つき進ませる方向。

師、沙弥を呼ぶ。沙弥應諾す。師云く、茶を煎れ来たれ。沙弥云く、茶を煎ることは辞せず。什摩の人に与えて喫せしむるや。師便ち口を動かす。沙弥云く、大いに茶を喫するを得ること難し。人有つて拈じて漳南に問う、又た須く、伊がをして茶を煎れしむべし。又た須く茶を喫するを得しむべし。合に作摩生か道わん。保福云く、此くの如くなりいと雖然も、何ぞ觀音をい字ばざる。

師が沙弥の名を呼んだ。沙弥がはいと返事した。師が云う、お茶を煎れて来い。沙弥が云う、お茶を煎れることはようございませぬ、いつたい誰にお飲ませになるのですか。師は口をもぐもぐと動かした。沙弥が云う、それではとてもお茶を飲めたものではないですよ。ある人がとりあげて漳南にたずねる、かれにお茶を煎れてこさせねばならぬだけでなくて、お茶を飲ませてあげねばならない時、どういふべきなのでしょう。保福が云う、いかにもそうだが、どうして觀音さまのまねをしないのか。

・漳南 保福を指す。漳南に住んでいた。

・保福の答は、沙弥の「与什摩人喫」に答えたもの。

・観音 趙州観音院の本尊様。

人有つて老婆に問う、趙州の路は什摩處いすこにか去くゆ。婆云く、葛底に去け。僧云く、是れ西邊に去くこと莫きや。婆云く、不是。僧云く、是れ東邊に去くこと莫きや。婆云く、也た不是。人有つて師に拳似す。師云く、老僧自ら去きて勘破せん。師自ら去きて問う、趙州の路は什摩處にか去く。老婆云く、葛底に去け。師は院に帰つて師僧に向かつて云く、勘破し了れり。

ある人が老婆に問う、趙州への道はどう行つたらいいのですか。婆さんが云う、そのままゆきなさい。僧が云う、西の方へ行くのかね。婆さんが云う、ちがう。僧が云う、東の方へゆくのかね。婆さんが云う、それもちがう。ある僧が師に話す。師が云う、わしが自分で行つてしらべてこよう。師は自ら出かけて行ってたずねる。趙州への道はどう行つたらいいのですか。老婆は云う、そのままゆきなさい。師は寺に帰つて弟子たちにむかつて云う、しらべてきたぞ。

・この一段、趙州録では「台山の路」とする。

・葛底去 動作の時間的速さが主眼。すつとゆきなさい。そのままゆきなさい。趙州録は「葛直去」。

・勘破了也 原文「敢破了也」とあるも「勘」に訂す。本質、素性を見てとること。

院主、上堂を請う。師、座に昇り如来梵を唱す。院主云く、比来、上堂を請う、這個は是れ如来梵なり。師云く、佛弟子の如来梵を唱すること、得ざるや。

院主が上堂説法を請つた。師は席にのぼり如来梵をとる。院主が云う、今しがた上堂説法を請つたのに、これは如来梵じゃないですか。師が云う、仏弟子が如来梵をとなくていかんか。

・如来梵 如来をほめる梵讚。織田辞典「如来唄」の項に云う、「如来妙色身等の二偈八句を梵唄の調子に諷すれば如来唄と云う、単に梵唄ともいう。勝鬘經に「如来妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬禮。如来色無尽、智慧亦復然、一切法常住、是故我歸依」という。

問う、口を開けば是れ一句なり。如何なるか是れ半句。師、便ち口を開く。

問う、口をあけたら一句です。どのようなのが半句でしょうか。師はすくさま口を開ける。

・師便開口 師が一句ならざる所の開口を實際にしてみせたところ。

三峯、師に見えて云く、上座何ぞ住し去らざる。師云く、什摩處か住するに好き。三峯、面前の山を指す。師云く、此れは是れ和尚の住處なり。

三峯が師にお会いして云う、上座はどうして住持なさらないのです。師が云う、どこが住持するのに好いところか。三峯は面前の山を指さす。師が云う、それは和尚が住持なさる処です。

・三峯 雲居道膺をいう。三峯山は雲居が草庵を構えた所。

・此是和尚住處 維摩經觀衆生品に「菩提無住處」、三峯に対する痛烈な批判である。

師、沙弥為りしとき、南泉を扶けて胡梯を上らせて問う、古人、三道の宝塔を以て人を接す。未審し和尚、如何んが接する。南泉乃ち梯を登りて云く、一、二、三、四、五。師、師伯に拳似す。師伯云く、汝は還た會するや。師云く、會せず。師伯云く、七、八、九、十。

師は沙弥だったとき、南泉をたすけて、胡梯をのぼらせて問う、古人は三道の宝塔でもって人に接した。和尚さんはどのように

接しられますか。南泉はそこで梯を登って云う、一、二、三、四、五。師は師伯にこの話しをする。師伯は云う、お前はわかったか。師が云う、わかりません。師伯が云う、七、八、九、十。

・三道寶階 帝釈天が金、銀、瑠璃の三つの宝階を化作したこと。仏が初利天より下りた階段をいう。「大唐故三蔵玄奘法師行状」に出る。

・師伯 南泉の弟子蕺菜和尚を指す。

南泉、銅瓶を指して僧に問う、汝道え、内淨か外淨か。僧云く、内外俱に淨なり。却って師に問う、師便ち剔却す。

南泉は銅瓶を指して僧に問う、お前は、内が淨か、外が淨か言ってみよ。僧が云う、内外ともに淨です。こんどは師に問う、師はずぐさま片付けてしまった。

師、南泉に問う、古人道えり、道は物外に非ず、物外は道に非ず、と。如何なるか是れ物外非道。泉便ち捧つ。師云く、錯つて打つこと莫かれ。南泉云く、龍蛇は弁じ易く、納子は謾じ難し。

師は南泉に問うた、古人は、道は物の外ではないし、物の外は道ではない、とっております。どのようなのが、物の外は道ではないということでしょう。泉はすぐに打つ。師が云う、やたら打たないで下さい。南泉が云う、龍と蛇は区別しやすいが、納子は馬鹿にできない。

・泉便棒 この棒が外ならぬ物だと示した処か。

問う、如何なるか是れ西来意。師云く、仲冬嚴寒。人有つて、雲居に拳似して便ち問う、只だ趙州の与摩に道う如きは、意作摩生そせきん。居云く、冬天は則ち有り、夏月は則ち無し。僧、師に拳似す。只だ雲居の与摩に道う如きは、意作摩生。師、此に因んで便ち偈を造つ

て曰く、石橋の南、趙州の北、中に観音有り、弥勒有り。祖師留下す一隻の履、直に如今に到るも覓め得ず。

問つ、どのようなのが祖師西來の意でしょうか。師が云う、冬のさなか、寒さ厳しき折。ある人が雲居に話して問つ、たとえば趙州があのように云つたのは、どんなつもりなのでしょう。雲居が云う、冬の空はあるが、夏の月はない。僧が師に話した、たとえば雲居があのように云つたのはどんなつもりでしょう。師はこれに因んで偈を作つていつ、石橋の南、趙州の北に、観音様が居られ弥勒様がおられる。祖師が留めおかれた一隻履は、今も見つからぬ。

・冬天云 冬の空はあるが、夏の月はない。仲冬厳寒を承けたもの。

・祖師留下云 祖師西來意を求めるのは、冬天に夏月を求めるようなものだ。祖師意は不可得であるといつことをいつたもの。

紫胡和尚、南泉に嗣ぐ、衢州に在り、未だ實録を觀ずして化縁の始終を決せず。

師、因みに劉鐵磨を勸して云く、劉鐵磨有りと説くを見る。便ち是なること莫きや。尼云く、什摩いすれの處にかこの消息を得來たる。師云く、左轉するや、右轉するや。尼云く、顛倒すること莫れ。師、之を打つ。南泉代わつて云く、此の便りに慣れ得たり。

師は劉鐵磨尼を確かめようとして云つた、劉鐵磨があるといわれているがほんとうか。尼が云う、どこからそんな話聞いてこられたのですか。師が云う、左にまわるのか、右にまわるのか。尼が云う、とりちがえないでもらいましょう。師は尼を打つ。南泉が代わつていつ、あなたはその手には慣れておいでだ。(或いは、私はその手には慣れている。)

・左轉右轉 鐵磨の名を引きつすにひっかけて問つたもの。

・慣得此便 原文は貫得此便、用例によつて改める。

師、時有りて云く、從來事は物に非ざるも、方便して名づけて佛と為す。中下は競いて是非するも、上士にして始めて屈せること

を知る。

師はあるとき偈を作つて云う、從來その事は物ではないが、方便で仏と名づけるのだ。中下のものはあれこれさわぐが、上士であつてはじめていわれないことと知る。

又云く、三十年來紫胡に住す、二時の齋粥さいじゆ氣力麗なり。毎日山に上るもの三五轉、頭を廻らして汝に問わん會するや、と。

又た云う、三十年來紫胡山に住し、二度のごはんで氣力はあらい。毎日四五回山のぼりをする、ふりかえつておたずねするが、できるかね。

師、半夜時に於いて叫喚すらく、賊なり、賊なりと。大衆皆走れり。師、僧堂の後に於いて一僧に遇い、攔胸把住して叫んで云く、捉え得たり、捉え得たり。維那を喚び来たれ。僧云く、是れ賊ならず、某甲なり。師云く、汝は正に是れ賊なり、只だ是れ汝肯えて承當せざるのみ。

人有り、拈じて漳南に問う、紫胡の賊を捉う、意は作摩生。云く、還はた肯えて与摩の波吒を受くるや。又た拈じて石門に問う、紫胡の賊を捉う、意は作摩生。云く、承當すれば則ち漢を駭かす。承當せざれば則ち紫胡汝を打つ。

師は夜半、賊だ、賊だと呼ばわつた。大衆は皆な逃げた。師は僧堂の後で一僧に出会い、胸ぐらつかんでとりおさえて叫んで云う、つかまえたぞ、つかまえたぞ。維那をよんで来い。僧は云う、賊ではありません、わたしです。師が云う、お前は正しく賊だ。ただお前が容認しようとしなだけだ。

ある人がこの話しをとりあげて漳南に問う、紫胡和尚は賊をとらえましたが、どういふつもりだったのですか。漳南が云う、あのような苦しみを進んで受けるだろうか。

また石門に問う、紫胡は賊をとらえましたが、どういふつもりだったのですか。石門が云う、容認すれば人をおどろかす。容認

しなければ紫胡和尚がお前を打つ。

・波吒 敦煌變文目連緣起に「放捨阿娘生淨土、莫交業道受波吒」、また、救母變文に「如来遣我看慈母、阿鼻地獄救波吒」などとあるのを参照。

・駭漢 本文に乱れがあるようである。

陸巨大夫、南泉和尚に嗣ぐ。公は親しく南泉の心戒を受く。

大夫、南泉に問う、家中に一片の石有り、或いは坐し、或いは踏む。如今、鑿りて佛像と作さん、還はた坐し得るや。南泉云く、得たり、得たり。陸巨云く、得ざること莫きや。泉云、得ず、得ず。雲岳云く、坐するときは則ち佛、坐せざるときは則ち佛に非ず。洞山云く、坐せざるときは則ち佛、坐するときは則ち佛に非ず。泉代わつて云く、只今はれ有なりや、是れ無なりや。

大夫が南泉に問う、家に一片の石があつて、坐つたり踏んだりしております。この度彫つて佛像にしようと思ひます。それでも坐り得ましようか。南泉が云う、よろしい、よろしい。陸巨が云う、いけないのではなんでしょうか。南泉が云う、いけない、いけない。雲岳が云う、坐れば佛だ、坐らなければ佛ではない。洞山が云う、坐らなければ佛だ、坐れば佛ではない。南泉が云う、一つの字をとつて二つの字を添えたなら仏法は大に行われるであろう。誰かとり得るものがあるか。答えるものはない。南泉が代わつて云う、いま有とするか、無とするか。

・摘 一个字以下の文と、前文とのつながりが明確ではない。別の一段としたいところだが、陸巨に全くかかわりがないので、一応つづくものとしておかねばなるまい。

大夫、南泉に問う、大衆の為に、請う和尚法を説け。泉云く、老僧をして作摩生そまさんか説かしめん。大夫云く、豈に和尚の方便無からんや。泉云く、大夫道え、他个は什摩をか欠少する。

大夫が南泉に問う、大衆のためにどうか和尚さん法を説いて下さい。南泉が云う、わしにどう説けというのだ。大夫が云う、和尚のやり方がありますが。南泉が云う、云つて見なさい、それに何が足らんといいのだ。

大夫、別時に云く、則今和尚不可思議なり。到處に世界成就す。師云く、適来あたらい問う底、惣に是れ大夫分上の事なり。

大夫が別の時に云う、いま和尚さんは不思議です。いたるところに世界を成就していらつしやる。師が云う、いま問うたことはすべてあなたのもちまえのことです。

大夫、又た因みに擲投を拈起して南泉に問う、与摩なるは又た得ず、与摩ならざるは又た得ず。正与摩に信彩し去る時如何ん。南泉、擲投を拈じて抛下して云く、髑骨頭、打つこと十八。人有つて石霜に拳似す、只だ髑骨頭、打つこと十八なるが如きんば、意作摩生。霜云く、汝は一半を道え、我は一半を道わん。進んで曰く、請う師、全く道え。云く、汝を怕る。

僧拈じて長慶に問う、南泉の与摩に道う、意作摩生。慶便ち之を拈して云く、今日、唯だ古人を明むるのみに非ず。又た云く、一彩両塞。

大夫がまたサイコロをつまみ上げて南泉に問う、そうであってもいけないし、そうでなくてもいけない。正に選択の余地のないところで目の出るにまかせるときどうですか。南泉はサイコロを投げて云う、髑骨頭は十八打たねばならん。ある人が石霜に拳似する、髑骨頭は十八打たねばならんというのは、どういふことですか。石霜が云う、お前さん半分いいなさい、わしが半分いい。進んで云う、どうぞ全部いって下さい。石霜が云う、お前がおそろしい。ある僧がこの話しをとりあげて長慶に問う、南泉があのようにいったのはどういふことでしょう。長慶はケンコツくらわせて云う、今日はただ古人のことを明らかにしてやった

けではないぞ。また云つ、二つの勝負に二つの勝ち目。

・一彩両塞 臨濟録行録に「両彩一賽」という語が見える。塞は賽が正しい。

仰山和尚、滄山に嗣ぐ、懐化に在り。師、諱は慧寂、俗姓は葉、韶州懐化の人なり。年十五にして、出家せんことを求むるも、父母許さず。年十七に至りて、又た再び去らんことを求む。父母は猶お慍む。其の夜、白光二道有り、曹溪より發し来たり、直に其の舎を貫く。父母則ち是れ子の出家の志感ずるなるを知りて、之を許す。師乃ち左手の無名指及び小指を断ち、父母の前に置き、養育の恩を答謝す。初め南化寺の通禪師の下に於いて剃髪す。年十八にして沙弥と為り行脚す。先に宗禪師に参じ、次いで就原に礼す。左右に在ること数年、境智明暗一相を學ぶ。一聞すれば再問せず。後、之を捨てて大滄に造る。初めて到るや自ら滄山に参ず。滄山曰く、者の沙弥は是れ有主の沙弥か、無主の沙弥か。師云く、有主の沙弥なり。滄山云く、主は什摩いすれの處に在りや。師、西邊に在つて立ち、却つて東邊に向いて立つ。滄山は其の異器なるを察し、与に言いて引接す。

仰山和尚、滄山に嗣ぐ、懐化に在り。師は、諱は慧寂、俗姓は葉、韶州懐化の出身である。十五才の時、出家を求めたが父母は許さなかつた。十七才になって再び出家しようとしたが、両親はまだ惜しがつた。其の夜、白光が二筋、曹溪から發して、まっすぐその家を貫いた。両親は子の出家の志が呼び起こしたものだと思つて、これを許した。師はそこで、左手の薬指と小指を切つて、父母の前に差し出し、養育の恩に感謝した。初め、南化寺の通禪師のところへ剃髪し、十八才の時、沙弥となつて行脚に出た。先づ宗禪師に参じ、次いで就原禪師に帰依してその左右に数年とどまり、境智明暗一相を學んだ。一度聞いたことは二度と質問しなかつた。その後、そこを捨てて大滄山に出掛け、着くとまず滄山に参禅した。滄山が云つ、この沙弥は、有主沙弥か、無主沙弥か。師が云つ、有主沙弥です。滄山が云つ、主はどこに居られるのか。師は西側に立ち、また東側に立つた。滄山は、そのすぐれた器量を見抜いて、話をして、指導教化した。

・境智明暗一相 境と智、そしてまた明と暗とは一相であるという事。慧忠国師語に、「如何一念相應。師曰、境智俱忘、即是

相応」(伝灯録卷二十八)、神会の顕宗記に「心境双亡」(伝灯録卷三十)という。石頭の参同契に「當明中有暗、勿以暗相遇、當暗中有明、勿以明相觀」。

師問つ、如何なるか是れ佛。瀉山云く、無思を思つの妙を以て、靈燄の無窮に返す。思い盡きて源に還り、性相常住、理事不二、真佛如如なり。師言下において頓悟し、指要を礼謝す。瀉山に在りて盤泊すること十四、五年の間、凡そ衆中に在りて瀉山に祇對し、玄秘を談揚す。鶯子の利辨、大雄の化を光かすと謂つ可きか。年三十五にして、衆を領して出世して住す。前後、諸州府の節察勅使、相い繼いで二十一入礼して師と為す。師、三靈に法輪を転ず。勅して澄虛大師、並びに紫衣を賜つ。

毎日、上堂して衆に謂いて云く、汝等諸人、各自に迴光返顧して吾が語を記すること莫れ。吾れは汝の無始曠劫來、明に背き暗に投じ、逐妄の根深く、卒に頓に抜き難きを慙む。所以に方便を假設して汝諸人の塵劫來の塵を奪う。黄葉を將つて止啼せしむるが如く、亦た、人の百種の貨物を將つて金寶に雜渾し、一鋪に貨売し、祇だ來機を輕重せんと擬するが如し。所以に道う、石頭は是れ真金鋪、我が者裏は是れ雜貨鋪なり、と。人有つて、來たりて雜貨鋪を覓むれば則ち我れ亦た他に拈じて与へ、來たりて真金を覓むれば、我れ亦た他に与つ。

時に人有つて問う、雜貨鋪は則ち問わず。和尚の真金を請う。師云く、齧齧して口を開かんと擬するも、驢年も亦た曾せず。僧對無し。又た云く、索喚は則ち有り、交易は則ち無し。所以に、我れ若し禅宗の旨を説かば身边に一人の相伴を覓むるも亦た無し。什摩の五百七百をか説かん。我れ若し東説西説せば則ち、頭を競つて向前に採拾す。空拳を將つて小兒を誘誑するが如く、都て実處無し。我れ今、分明に汝に向かつて聖辺のことを説かん。且く、心を將つて湊泊する莫れ。但だ身前の義海に向かつて如實に修せよ。三明六通は要せず。此れは是れ聖末辺の事なり。如今、且く、心を識り本に達せんことを要す。但だ其の本を得て其の末を愁えざるのみ。他時後日、自ら具足し去ることたらん。若し未だ其の本を得ざれば、縦饒い情を將つて他を學ぶも亦た得ず。汝、何ぞ見ざる

や。瀉山和尚云く、凡聖の情盡き、躰露真心常住、理事不二なる、即ち是れ如如佛なり、と。珍重。

毎日の上堂で大衆に云われた、汝諸人それぞれ光をめぐらして、内に顧みなさい。私の言葉を記憶してはいけない。汝諸人が昔からずっと明に背き、暗に入り込み、迷いの根が深くてすぐには抜きがたいのを不敏に思う。それで方便でもって汝諸人の昔からの障りをなくそうとするのである。それは、子供に黄葉をやつて泣き止めさせるようなものであり、また、人が多くの種類の品物を金宝の中にまぜて、一つの店で売り、買いに來る人次第で応ずるようなもの。それ故、石頭は真金鋪で、私のところは雜貨鋪だといふ。有る人が雜貨を求めにやつてくれれば与え、真金を覓める人には(真金を)与える。

時に有る人が尋ねた、雜貨屋のことはさておいて、和尚の真金を売つて下さい。師が云う、鏝をかもうと口を開こうとしても、できる時は來ない。僧は對えない。また云う、注文すれば有るし、売買しようとするれば無い。だから、私が禅宗の旨を説こうとするれば、身の回りには一人も連れがいない。況や、五百、七百なんかいない。私がもし、あれこれと話せば、争つて言葉を拾つて執するだろう。からのこぶしで子供を引き寄せるようなもので、その実何もないのである。私は今、はつきりとお前に聖辺の事を説こう。だが妄心で近づいてはならない。ただ身前の眞實世界において如実に修しなさい。三明とか六神道とかは必要ない。これは聖末辺の事にすぎない。いま心を識り根本に達することが肝心である。根本を得れば末は気にはならない。いつかは具足するだろう。もしまだその本を得ていないなら、妄心で学ぼうとしてもだめだ。お前は、聞いているだろう。瀉山和尚が云つておられる、「凡聖の情が尽き、まるごと常住の真心を露わにすれば、理事不二であり、とりもなおさず如如佛だ」と。珍重。

・石頭是真金鋪云 葉山の章には、「石頭是真金鋪、江西是雜貨鋪」(巻四一七六頁)。

・齧鏝 飛んでくる矢のやじりをガツキと齒で受けとめるという峻機。

問う、法身還た解く法を説くや。師云く、我は則ち説き得ざるも、別に人有りて説き得。進んで曰く、説き得る底の人、什摩の處にか在る。師乃ち枕子を推出す。僧、後に瀉山に拳似す。瀉山云く、寂子劔刃上の事を用いたり。人有つて雪峯に拳似す。雪峯云く、

瀉山和尚、背後に与摩に道つことは則ち得たり。人有つて拈じて問う、當衛の時作摩生。福先代わつて手を以て打つ勢を作す。報恩代わつて云く、誰か敢えて出頭せん。

問う、法身は法を説くことができますか。師が云う、わしは説き得ないけれども、ほかに説き得るものがある。進んで云う、説き得る人というのはどこにいますか。そこで師は枕をおし出す。

僧はのちに瀉山に拳似する。瀉山が云う、寂さんするどい切れ味だな。ある人が雪峯に拳似する。雪峯が云う、瀉山和尚、うしろでそういうのはよろしかろう。ある人が拈じて問う、正面きつての時はどうですか。福先が代わつて打つしぐさをする。報恩が代わつて云う、とてもそこに出頭するものはいない。

・當衛 衛は役所。役所で事務をとることか。あるいは當陽の間違いか。

師、僧と共に説話する次いで、傍の僧云く、語る底原文なしは是れ文殊、嘿する底は是れ維摩。師云く、不語不嘿是れ公なること莫きや。其の僧良久す。師問うて曰く、何ぞ神通を現せざる。其の僧云く、神通を現することを辞せざるも、恐らくは和尚収めて教に入れん。師云く、公の来處を變るに未だ教外の眼有らず。

師が僧と話をしているとき、かたわらの僧が云つた、話しているのが文殊で、だまっているのが維摩。師が云う、語らずだまらずがあなたなんだね。その僧はしばらくだまっている。師が問うて云う、どうして手なみを見せないのだ。その僧が云う、手なみを見せることは辞しませんが、おそらく和尚さん教におさめいれるでしょう。師が云う、あなたの来處を見るに、まだ教外の眼がない。

師、俗官に問う、今の什摩をか至す。對えて云く、衛推なり。師、柱杖を拈起して云く、還た這个を推し得るや。無對。師代わつて云く、若し是れ這个ならば別時を待ちて来たれ。興化代わつて云く、和尚、事有り。

師が俗官に問う、何をしておるか。答えて云う、衛推です。師は柱杖をとりあげて云う、これをとり調へうるか。無对。師が代わって云う、その件ならばあらためて出頭せよ。興化が代わって云う、和尚さんご多忙ですなあ。

・衛推 軍府の属官。

・和尚有事在 句末の「在」は強い断定の語気を表わす。

師、上座に問う、不思善、不思悪、正与摩の時作摩生。上座云く、正与摩の時、ム甲、身命を放つる處なり。師云く、何ぞ某甲に問わざる。云く、与摩の時、和尚有ることを見ず。師云く、我が教を扶け起こさず。

師は上座に問う、不思善、不思悪、まさにそんなときどうだ。上座が云う、そんな時こそわたしが身命をすてるどころです。師が云う、どうしてわしにたずねんのだ。上座が云う、そんな時、和尚がいるのを見ません。師が云う、わしの教の助けにはならん。

・不思善不思悪云 六祖慧能の語。

師、納衣を洗う次いで、孰源問う、正与摩の時作摩生。師云く、了然たり二俱に無為。又た云く、正与摩の時、某甲渠を思量せず。又た云く、正与摩の時、什摩いずれの處あに向いてか渠を見る。

師が納衣を洗っているとき、孰源が問うた、まさにそんな時どうだ。師が云う、はっきりと、両者とも無為であります。また云う、そんなときわたしは彼のことを考えません。また云う、そんなときどこに彼を見ましよう。

・不思議渠 洞山の渡水の偈を想起せしめる。

師、景岑上座の中庭に在って日に向つを見る次いで、師は辺より過ぎて云く、人人盡く這個の事有るも、只だ是れ道不得のみ。云く、恰も是、請う汝道え。師云く、作摩生か道わん。岑上座便ち攔胸して一踏を与う。師倒る。起ち来たりて云く、師叔の用使、直

下にはれ大虫に相い似たり。

師は景岑上座が中庭で日に向かっているのを見たとき、そばを通って云った、それぞれみんなこの事があるけれども、ただいえないだけなんです。景岑が云う、まさにそのとおり、じゃあ君いつてくれ。師が云う、どういえとおっしゃるのですか。岑上座は胸ぐらつかんで一けりけりあげた。師は倒れる。起きあがって云う、あなたのやり方はまるで虎そっくりです。

・用使 よくわからない語であるが、一応右のように解しておく。

・恰是 原文は恰似。似と是は通用することがある。

師、東平に在り。看経せし時、僧有りて侍立せり。師、経を巻却し、頭を廻らして問う、還た會するや。對えて云く、某甲は曾つて看経せず。争でか會するを得ん。師云く、汝は向後也た會し去る在らん。

師は東平にいた。経を読んでいるとき、ある僧が侍立した。師は経をまいて、ふりむいて問うた、わかるか。答えて云う、わたしはかつて経を読んだことがありますのにどうしてわかりましよう。師が云う、お前さんもこれからさきわかるるときがあるよ。

・師在東平 伝灯録十一仰山伝に「於韶州東平山示滅」とある。

師、韋曹相公と相見す。後ち問う、院中多少の人有りや。師云く、五百人。公云く、還た切に看読するや。師云く、曹溪の宗旨は切に看読せず。公云く、作摩生。師云く、不収、不攝、不思。

師は韋曹相公と相見した。のち問う、院中にはどれだけの人がおりますか。師が云う、五百人。公が云う、ねんころに経を読みますか。師が云う、曹溪の宗旨では、ねんころには経を読まない。公が云う、どうされるのです。師が云う、不収、不攝、不思。

・不収不攝不思 よくわからない。攝が収と反対の意味をもつ語であれば、「不収と不」と思わず」と読めそうである。

相公、瀉山に就いて偈子を乞えり。瀉山云く、覲面に相呈するも猶お是れ鈍漢。豈に況んや紙墨に上すをや。又た師に就いて偈子を乞う。師、紙を將もつて圓相を畫き、圓相中に某字を著け、謹んで答つ、左辺に思いて之を知るも第二頭に落つ。右辺に思わずして之を知るも第三首に落つ。乃ち封じて相公に与えたり。

相公が瀉山に偈をたのんだ。瀉山が云う、まっこうから見せているのにぼんやりだ。紙なんぞに書いてやればなおさらだ。今度は師にたのんだ。師は紙に円相を書き、円相の中にある字を書いたうえ、謹んでこたえます、左辺に思つてこれを知つても第二頭に落ちます。右辺に思わないでこれを知つても第三首に落ちます、と書いて封をして相公にあたえた。

問う、弓を彎いて満月の如し。鏃を齧む意如何ん。師云く、鏃を噛むに口を開かんと擬するも、驢年も也た會せず。南泉對つるに、身を側てて立つ。強大師拈じて問う、鏃を噛むに、口を開かんと擬するも、驢年も也た會せず、と。国師云く、損益は只だ句に安在すべし。淨修禪師答えて曰く、仰山の鏃を噛むの話は、擬議するも都て會し難し。指は後來を益せんと擬するも、言は這邊を損す。石門拈じて僧に問う、古人會を留むるや、會を留めざるや。對無し。門代わつて云く、會を留めず。進んで曰く、作摩生か會する。

・齧鏃意 鏃を口でくわえとること。教えることの出来ない、言葉で教えられない消息。

・嚙鏃擬開口 とんでくる鏃をかみとろうとして口を開けて待つこと。また、嚙鏃を言葉で説明するという意もある。

・南泉 普願ではなからう。没年に約五十年の隔りがある。側身、鏃を避ける動作をしたもの。

・強大師云 問い方意義不詳。国師の云う損益云々を引き出す問い方が。

・国師 伝灯録卷十八福州鼓山興聖国師神晏。祖堂集卷十。

・石門の拈問は、古人即ち仰山が、嚙鏃擬開口驢年也不会と言つたことに對して、会すという可能性を残しているか残していないかと問つたもの。

・進曰 又曰の誤りか。

・作摩生会 以下に脱文があるう。

雙峯、瀉山を離れて仰山に到る。師問う、兄は近日作摩生そちさん。雙峯云く、某甲の見る所、一法の情に當る可きもの有る無し。師云く、
 你の見る所は心境を出でず。進んで曰く、某甲の見る所は心境を出でず。和尚の見る所は如何ん。師云く、豈に寔に一法の情に當る
 可きなきを能く知るもの無からんや。有る僧、瀉山に拳似す。瀉山云く、寂子の此の語、天下の人を迷却し去らん。順徳の頌に、雙
 峯覽ること自ら庵なり、是れ仰山の屈せるには非ず。汝の解繩を挑げて抽き、宗徒に把當して説く。一盲の衆盲を引く、古を會すこ
 と今日に在り。

・近日作摩生 近ごろ至り得た境涯はどうだ。

・當情 分別的な認識の対象となる。伝心法要に「自己尚不可得、何況更別有法當情」。良寛の草堂詩集に「迷悟相依成、理事
 是一般。竟曰無字終、終夜不習禪。鸞轉垂楊岸、犬吠夜月村。無更法當情、甚有心可伝」。

・你所見不出心境 伝灯録は「汝解猶在境」。

・寂子此語迷却云 伝灯録は「疑殺」とある。玄寛のコメントを附す。

・解繩 自らをしぼりつけている所見、知解。

・一盲云 大般涅槃經卷二十九。一人の盲者が多くの盲者を引き連れて、何も見えず、ただ迷妄を増すだけだということ。一
 盲は双峯を批判したもの。仰山も含まれるか。

師、有る時、正与摩に閉目して坐する次いで、有る一僧、歩を潜めて師の身边に到って侍立す。師開門して便ち地上に於いて圓相
 を作り、圓相中に水字を書して顧示す。其の僧對無し。

問う、如何なるか是れ祖師意。師、手を以て圓相を作し、圓相に佛字を書して對う。

有る行者、法師に随つて佛殿に入る。行者、佛に向かつて唾す。法師云く、行者去就を少く、何を以て佛に唾すや。行者云く、我に無佛の處を還し来たらば唾せん。瀉山聞いて云く、仁者は却つて仁者ならず。仁者ならざる却つて是れ仁者なり。師、法師に代わるらく、但だ行者に唾せよ。行者若し語有らば即ち云え、我に無行者の處を還し来たらば唾せん、と。

ある行者が法師に随つて佛殿に入った。行者は仏に向かつて唾を吐きかけた。法師が云う、行者は無作法だ。どうして仏に唾を吐きかけるのか。行者が云う、私に仏の居ない処を出してくれたら唾しましょう。瀉山はこれを聞いて云う、仁者は仁者ではない。不仁者こそ仁者である。師が法師に代わつて云う、行者に唾しなさい。行者がもし文句を言つたら言つてやりなさい、私に行者の居ない処を出してくれたら唾しましょう、と。

・この一段、伝灯録卷二十七に載せる。

有る俗官、物を送り、瀉山の鐘を贖つに充つ。瀉山、仰山に謂いて云く、俗子は福を愛するなり。仰山云く、和尚は什摩を將つてか他に酬ゆる。師、柱杖を把つて丈牀を敲くこと三兩下して云く、這個を將つて他に酬い得るや。仰山云く、若し是れ這個ならば用いて什摩をか作す。師云く、汝は今の什摩をか嫌う。仰山云く、專甲は即ち這個を嫌わず、是れ大家底と為す。師云く、汝は既に大家底なるを知る。更に我に就いて什摩を覺めて他に酬いせしむるや。仰山云く、和尚の大家底を把つて人事を行ずるを恠む。瀉山云く、汝見ずや、達摩西天より来り、亦た此の物を將つて人事を行ず。汝諸人盡く是れ他の信物を受くる者なり。

有る俗官が品物を送つて、瀉山が鐘を買つのに充当した。瀉山が仰山に云う、俗官は福德が好きだ。仰山が云う、和尚さんは何で彼に酬いますか。師は柱杖をつかんで丈牀を二三度たたいて云う、これで彼に酬いことができるか。仰山が云う、若しこれならば何の役に立ちますか。師が云う、お前は何を嫌っているのか。仰山が云う、私はこれを嫌つてはおりません。是れがみんなの

物だからです。師が云つ、お前はもう皆の物だと知っている。その上、私に何でもって彼に酬いさせようといふのか。仰山が云つ、和尚さんが、みんなの物を贈り物として使うのをいぶかっているのです。瀉山が云つ、お前は知らんのか。達磨は西天からやって来て、また此の物で贈り物をしたことを。お前たちみなその贈り物を受けているのだ。

・行人事 礼物を持って行って挨拶する。

・此の一段「師云」は瀉山を指す。

師、衆に示して云く、与摩の時は且らく置く。与摩ならざる時作摩生。人有り瀉山に拳似す。瀉山云く、寂子人の為にすること太だ早し。

師が衆に示して云つ、そのようである時のことはしばらくおく。そのようでないときどうする。ある人がこの話を瀉山にする。瀉山が云つ、寂さんの為人は性急すぎるな。

因みに瀉山、師と遊山して説話する次いで云く、色を見て便ち心を見る。仰山云く、承るらく和尚に言有り、色を見て便ち心を見ると。樹子は是れ色なり。阿那个か是れ和尚、色上に見る底の心なる。瀉山云く、汝若し心を見れば云何んぞ色を見ん、色を見る即ち是れ汝が心なり。仰山云く、若し与摩ならば但だ言え、先に心を見て然る後に色を見ると。云何んぞ色を見了つて心を見ん。瀉山云く、我れ今樹子と共に語る、汝は還た聞くや。仰山云く、和尚若し樹子と共に語れば但だ樹子と共にのみ語れ。又た某甲に聞と不聞とを問つて什摩をか作す。瀉山云く、我れ今亦た子と共に語る、子は還た聞くや。仰山云く、和尚若し某甲と共に語らば、但だ某甲と共に語れ。又た某甲に聞と不聞とを問わば、樹子に聞と不聞とを問取して始めて得了らん。

あるとき瀉山は師と遊山しつつ話をしていたが、云つ、色を見て心を見る。仰山が云つ、うかがえば、和尚さんは色を見て心を見るとおつしやっておられます。(あの)木は色です。どれが和尚さんが色上に見る底の心ですかあの色に見とつた和尚さんの心で

すか。瀉山が云う、お前さんがもし心を見るならばどうして色を見ようか。色を見るものがお前さんの心にほかならない。仰山が云う、もしそうであるならば、先に心を見てかかるのちに色を見るとのみ言いそうなものです。どうして色を見おわって心を見るなんてことがありますようか。瀉山が云う、わしはいま木と話しているのだが、お前さんに聞こえるか。仰山が云う、和尚さんもし木と話しているのならただ木と話してください。それなのにわたしに聞こえるか聞こえないかなどときいてどうしようとおっしゃるのですか。もしわたしに聞こえるか聞こえないかを問うのなら、木にも聞こえるか聞こえないかをきいてもらわなくてはなりません。

・ 見色便見心 卷七雪峯の伝に「古人道、見色便見心、心外無餘」とある。また馬祖に「三界唯心、森羅万象、一法之所印、凡所見色、皆是見心、心不自心、因色故有心」という語がある。

師、瀉山に在りし時、雪下るの日、仰山問を置す、這個の色を除却して還た更に色有りや。瀉山云く、有り。師云く、如何なるか是れ色。瀉山雪を指す。仰山云く、某甲は則ち与摩ならず。瀉山云く、是なり、理長すれば則ち就かん。這個の色を除却して還た更に色有りや。仰山云く、有り。瀉山云く、如何なるか是れ色。仰山却つて雪を指す。

師が瀉山にいた時のことである。雪がふる日、仰山は問うた、この色をのぞいてさらに色がありますか。瀉山が云う、ある。師が云う、その色とはどんなのですか。瀉山は雪を指さす。仰山が居つ、わたしはそうではありません。瀉山が云う、そうか。理がすべければつこう。この色をのぞいてさらに色があるか。仰山が云う、あります。瀉山が云う、その色とはどういふものだ。こゝんとは仰山が雪を指さす。

・ 理長則就 一一一七六頁、二二四九頁に同じ句が出る。

洞山、人を遣わして師に問わしむ。作摩生なれば即ち是、作摩生なれば則ち不是。師云く、是なるときは則ち一切皆な是、不是なるときは則ち一切不是。洞山自ら云く、是なるときは一切不是、不是なるときは一切是。師偈ありて曰く、法身作す無く化身作す、薄伽は玄に應ず諸病の薬。喙唵響を聞きて唵吠せんと擬す、焰水に魚を覓むる癡老鶴。

洞山が人をやって師に問わせた、どうしたら是であり、どうしたら是ではないかと。師は云う、是とすることは一切がすべて是であり、是でないとするときは一切がすべて是でない。洞山は自ら云う、是とすることは一切がすべて是でなく、是でないとするときは一切がすべて是である。師は偈を造つて云う、法身はなすことなく化身がなす、仏は諸病の薬としていみじくもあらわれたまう。遠吠えを聞いてほえかかる、厩気楼の川に魚をさがすバカな老い鶴。

師、沙弥たりし時、宗和尚の處に在つて、童行房裏ずんなんに念経せり。宗和尚問う、誰か這裏に在つて念経する。對えて云く、専甲獨自に念ず、別に人無し。宗和尚喝して云く、什摩の念経ぞ、恰も唱曲唱歌するに似て相い似たり。与摩に念経を解よくせざることを得たり。師便ち問う、某甲は則ち此くの如し、和尚は還はた解よく念経するや。云く、我れ解よく念経す。師曰く、和尚作摩生か念ぜん。宗和尚念ずらく、如是我聞。師便ち云く、住やみね、住みね。

師は沙弥だったとき、宗和尚の処にいて童行房で経をとなえていた。宗和尚が問う、たれがここで経をよんでいるのだ。こたえて云う、わたしがひとりです。ほかに人はおりません。宗和尚がどなって云う、なんの経をよむだ。まるで流行歌でもうたっているみたいじゃないか。よくもまあそれだけ経がよめないものだ。師が問う、わたしはこのとおりです。和尚さんは経がよめるのですか。云う、わしはよめるよ。師が云う、和尚さんどうよまれますか。宗和尚がとなえて云う、如是我聞。師がいう、止みね、止みね。

・住住 法華經方便品に「止止不須説 我法妙難思」とある句をふむ。

問う、今日、瀧山の齋を設く、未審いぶかし瀧山は還た來たるや。師云く、來たるときは則ち去る有り、去るときは則ち來たる有り。
問う、今日は瀧山和尚の齋会です。瀧山和尚はもどつてこられるのでしょうか。師がいつ、來るときは去ることがある。去るときは來ることがある。

瀧山、師を喚ぶ。師喏す。瀧山云く、速かに道え、速かに道え、子、陰に落ちること莫れ。云く、專甲信も亦た立てず。云く、汝、何が故に信を立てざるや。云く、若し是れ專甲ならば更に阿誰をか信ぜん。云く、汝、解よくするが故に立てざるや、解よくせざるが故に立てざるや。云く、若し立てざれば解くすると解くせざるとを説かず。云く、汝は是れ定性の聲聞なり。云く、專甲は佛も亦た見ず。

瀧山が師を呼ぶ。師はハアと返事をする。瀧山が云う、さあ一句吐け、五蘊に落ちこんではならぬぞ。云う、わたしは信も立てません。云う、どうして信を立てないのだ。云う、わたしとしたことがあらためて誰を信じましょう。云う、お前さんできるから立てないのか。できないから立てないのか。云う、立てないのなら、できるできないは関係ありません。云う、お前さんはどうしようもない声聞だ。云う、わたしは仏も見ません。

・子莫落陰 落陰という言葉がわかりにくい。陰は五陰のそれであるから、そつすることによって痕跡をのこすようない方をしてはならないというような意味である。

・定性聲聞 相手のしたたかさに閉口している面もあるである。

師、一物を挙げて、瀧山に問うて云く、与摩の時如何ん。瀧山曰く、分別すれば色塵に属す。我は這裏に到りては与摩かと摩ならざるか。仰山云く、和尚は躰有るも而も用無し。瀧山云く、子如何ん。仰山云く、某甲は信も亦た立てず。瀧山云く、什摩と為て

か信を立てざる。仰山云く、若し是れ某甲ならば更に阿誰をか信せん。滄山云く、有にして立てざるか、無にして立てざるか。仰山云く、立てざれば有無を説かず。滄山云く、子は是れ定性の声聞なり。仰山云く、専甲、這裏に到りては佛すら尚お見ず。滄山云く、子は向後、吾が声教を傳えて闊狭に行歩せしめん。吾れ子に及ばず。

師は一物をとりあげて滄山に問う、こつであるときどつですか。滄山が云う、分別すれば色境に属する。わしはここにおよんではそつであることもそつではない。仰山が云う、和尚さんには体はあるけれども用がない。滄山が云う、あんたはどつだ。仰山が云う、わたしは信も立てません。滄山が云う、どつして信を立てないのだ。仰山が云う、わたしとしたことがあらためて誰を信じましよう。滄山が云う、有つて立てないのか、無くて立てないのか。仰山が云う、立てないのなら有無には關係がありません。滄山が云う、あんたはどつしようも無い声聞だ。仰山が云う、わたしはここにおよんでは仏すら見ません。滄山が云う、あんたはこの先、わしの教を天下に広めるであろう。わしはあんたにゃおよばん。

・有躰而無用 躰、原文は身。

師、沙弥たりし時、就源に在つて唱礼する次いで、就源問う、什摩をか作す。師云く、唱礼す。源云く、礼文、什摩と道つぞ。對えて云く、一切に恭敬す。源云く、忽ち不浄底に遇わば作摩生。師曰く、不審。

師は沙弥だつたころ、就源の下で礼文をとなえていたところ、就源が問つた、なにをしている。師が云う、礼文をとなえています。就源が云う、礼文にはどつあるか。こたえて云う、一切に恭敬すです。就源が云う、ひょつと不浄底に出会つたらどつする。師が云う、こんには。

・不浄底 鶴林玄素の伝宗高僧伝卷九に、屠殺を業とするものまねきに応じたことを土庶驚駭してみな異なりと称したといつから、あるいはそのよつな職業にあるものを賤民あつかひしてこのよつに呼ぶことがあつたのかもしれない。

第一、韋中承和尚に問うて曰く、五祖は云何んが衣鉢を慧能に分付して、神秀に分付せざる。既に分付して後、云何んが慧明又た五祖下より大庾嶺頭に趣^ま到し、其の衣鉢を奪わんとせる。復た何の意有つてか衣を得ずして廻るや。某甲城に在つて曾て師僧に問うに、悉く各々説くこと同じからず。某甲は常に此の事を疑つ。和尚は稟承に師有り、願わくは、一決を垂れたまえ。師答えて曰く、此は是れ宗門中の事なり。曾て先師の薨に於いて説くを聞くに、登時五祖下に七百の僧有り。五祖遷化せんと欲するの時、人の伝法し衣鉢を分付するを覓るに、衆中に一上座有り、名づけて神秀と曰う。遂に一偈を造つて五祖に上る。身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し。時時に勤めて拂拭して、塵埃を有ら遣むる莫れ、と。後に磨坊中の盧行者^{ゆんぎやう}、此の偈有るを聞き、遂に一偈を作つて五祖に上る、曰く、菩提本と樹無く、明鏡も亦た臺に非ず。本来無一物、何處にか塵埃有らん、と。五祖亦た此の偈を見て、並に言語無し。遂に夜間に於いて、童子をして碓坊中に去かしめ、行者を喚び来らしむ。行者、童子に随つて五祖の薨に到る。五祖童子を發遣却して後、遂に盧行者を改めて名づけて慧能と爲し、衣鉢を授与し、伝えて六祖と爲す。行者に向かつて云く、秀は門外に在り。能は入門するを得たり。得座被衣、向後自ら看よ。二十年吾が教を弘むること勿れ。當に難の起ること有るべし。此を過ぎて已後、善く迷人を誘へ、と。慧能便ち問う、當に何處に往きて難を避くるに堪つべきや。五祖云く、懷に逢えば即ち隱れ、會に遇えば即ち逃れ、姓を異にし、名を異にすれば、即ち當に安かるべし、と。行者既に付属の衣鉢を得、五祖發遣す。時に即ち嶺南に發去す。五日の後、五祖衆人を集めて告げて曰く、此間^{すかん}に佛法無し。此の語は意、六祖を顕わす。衆僧、五祖に問う、衣鉢は何人にか分付せる。五祖云く、能ある者即ち得たり、と。衆僧、碓坊中の行者を商議す。又た童子の泄語することを被り、衆僧、即ち盧行者の衣鉢を將つて嶺南に歸するを知る。衆僧遂に趣つ。

・慧能の伝は卷二に在り、「壇經」「別伝」のあとを承ける。

・五祖下有七百 弟子が七百人いたといふ。後「黃梅七百高僧」の成語の典拠である。

・本来無一物 古くは「仏性常清淨」(敦煌本壇經など)、この段は、「本来無一物」の古い例であり、後に定着する。

・亦 ひとたび。……するや否やの意。

・二十年云 後にいう「聖胎長養二十年」とある語の典故となるもの。

・逢懷云 後に説明のある如く、懷は懷州、會は四會県。別伝には四會県と懷州の地にひそんで五年間獵師になっていたといふ。

・此語云 註の部分が混入したものであろう。

衆中に一僧有り、官を捨てて道に入る。先は是れ三品將軍、姓は陳、字は慧明、星夜倍程、大庾嶺頭に至る。行者来り趁うを知り、遂に衣鉢を放つて林に入り盤石上に向いて坐す。其の慧明、嶺上に其の衣鉢を見て向前して手を已もつて、之を拾ぐるに衣鉢動ぜず。便ち自ら力薄きを知りて、即ち山に入り、行者を山の高处に見むるに林中に行者の石上に在つて坐するを見る。行者、遙に恵明を見て便ち来たりて衣鉢を奪はんとするを知る。即ち云く、我が祖、衣鉢を分付す。我れ苦辞して受けず。將ち来るといふ見に巖頭に在り、上座もめんと欲せば便ち請う、將ち去れと。慧明答う、我れは衣鉢の為に来らず。只だ法の為に来る。知らず、行者、五祖を離れし時、何の密意密語有りや。願わくは我が為に説きたまえ。行者は苦に求むるを見て、(便)即ち与に説く、先ず石上に向いて端座静慮せしめ、不思善不思惡、正与摩に思生せざる時、我に本来の明上座の面目を還し来れ。恵明問うて云く、上來の密意は即ち這个是れか、為は當た別更に意旨有るか。行者云く、我れ今分明に汝が為に説著して、却つて不密を成ず。汝若し自ら自己の面目を得れば、密は却つて汝が辺に在り。慧明、行者に問うて云く、汝、黄梅和尚の身边に在り、意旨復た如何ん。行者云く、和尚、我が秀上座に對する偈を見て、即ち我が入門の意を知り、即ち慧能に印して云く、秀は門外に在り、能は門に入るを得て得座被衣す。向後自ら看よ。此の衣鉢は従上来分付す。切に須く人を得べし。我れ今汝に付す、努力し將ち去れ。二十年吾が教を弘むる勿れ。當に難の起こること有るべし。此を過ぎて已後、善く迷情を誘え、と。慧能問うて云く、當に何処に於いて難を避くるに堪つべきや。五祖云く、懷に逢えば即ち隱れ、會に逢えば即ち逃がる。「懷は即ち懷州、會は即ち四會県なり」姓を異にし、名を異にすれば當に即ち安かるべし、と。時に慧明云く、黄梅に在つて剃髮すと雖も、實に禅宗の面目を知らず。今、入處を指授することを蒙りて、人の水

を飲んで冷暖自知するが如し。今日より向後、行者は即ち是れ慧明の師なり。今、便ち名を改めて、号して道明と為す。行者曰く、汝若し是の如くんば、吾も亦た是の如し。汝と同じく黄梅を師として異らず、善く自ら護持せよ。道明曰く、和尚好く速やかに南に向かつて去れ。在後、大いに人來つて和尚を趁つ有り。道明の尽く却指して廻らすを待て。今便ち和尚を礼辞して北に向かつて去らん。道明嶺頭に在つて分首して便ち發つて北に向かつて去る。虔州において果たして五十餘僧の來つて盧行者を尋ぬるを見る。道明、僧に向かつて曰く、我れ大庾嶺頭の懷化鎮の左右に在つて、五六日等候し、諸の関津を借訪するも、並に此の色目の人の過ぐるを見ず。諸人は却つて北に向かつて尋覓せよ。云く、其の人は石碓もて腰を碰損し、行李恐らく難からん。衆人頭を分つて散ず。後、道明独り、廬山の布水基に往き、三年を経し後、蒙山に歸りて修行して後、徒弟を出して、尽く嶺南に六祖の處へ礼拝せしむ。今に至つて、蒙山の靈塔見に在り。

・ 字不明の所()にて補つ。

・ 来奪衣鉢 卷二は「便知来奪我衣鉢」。

・ 向後 将来の意。

・ 逢懷^云 表面上の意はしたつてくる人に逢えば隠れ、集まりに遇えば逃れる。

・ 虔州 原文虎州を改む。

・ 時に慧明云く「云」を補つ。

・ 等候 待つ^の意。

・ 色目の人 そついつた種類の人。

第二、苑陵の僧、道存問うて曰く、和尚、沙汰の後、再び湖南に到りて瀉山和尚に礼觀せり。復た何の微妙の言説か有りし。和尚云く、我れ難の後、瀉山に到りしに、一日、我に問うことを得たり、汝、仰山に在りて住持し及び法を説く、他人を誑惑すること莫

きや。仰山云く、自己の眼目に随う。滄山云く、汝、争でか諸方の師僧を辯じ得て、師承有りと知り、師承無しと知り、是れ義学なりと知り、是れ禅学なりと知らん。宗門の事宜、我に説似し看よ。仰山、和尚に諮つて云く、辯じ得るなり。滄山云く、諸方の學人の來たる有り、汝に曹溪の意旨を問わん。汝、如何んが渠かに答えん。仰山云く、大徳、近ごろ何れの處よりか來たれる。學人答つらく、近ごろ諸方の老宿の処より來たれり。仰山即ち一境を挙して問つて云く、諸方の老宿還また這个を説きしや、這个を説かざりしや。或る時は一境を挙して云く、這个は則ち且らく置く、還た諸方の老宿、意旨如何ん。已上兩則は境智なり。滄山、説くを聞きて歎じて曰く、大いに好し、此れ亦た是れ従上来宗門の牙爪なり。

第二、菟陵の僧、道存が問つて云つ、和尚は破仏事件ののちふたたび湖南に行つて滄山和尚に目通りなさつていらつしやいます。何か素敵なことをいわれましたか。和尚が云つ、わたしは難ののち滄山に行つたが、ある日わたしに問われた、お前さんは仰山に住持して法を説いているが、ひとをたぶらかしているのではないか。仰山が云つ、自分の眼目まなこにしたがつております。滄山が云つ、どうして諸方の師僧に師承があるかないか、義学の徒であるか禅学の徒であるか、お前さんに見分けられようか。宗門の消息をわたしに言つてみなさい。わたしは和尚に申し上げて云つた、見分けられます。滄山が云つ、諸方の學人が來て、曹溪の意旨を問つたら、どう答えてやるか。わたしが云つ、大徳、この度はどこからおいでになつた、と云つと學人が答えます、この度は諸方の老宿のところからやつて参りました。そこでわたしは一境をとりあげて問つて云います、諸方の老宿はこれを云つたか云わなかつたか。あるときは一境をとりあげて云います、これはまあおいておこつ、諸方の老宿の意旨はどつだ。以上の兩則は境智であります。滄山はそれを聞いて感歎して云つた、大変けつこつ、これもまた伝統ある宗門の荷い手だ。

・還諸方老宿意旨如何 還は疑問詞としては破格の用法。

滄山又た云く、忽もし人有つて問わん、一切衆生、但だ忙忙たる業識有るのみにして本の據る可き無し、と。汝、云何んが答えん。仰山云く、鷲に學人の名を呼び、學人應諾すれば仰山問わん、是れ什摩物なにぞ、と。學人答えて云わん、不會と。仰山云く、汝も亦た本の

據る可き無し。但だに忙忙たる業識なるのみに非ず、と。滄山云く、此は是れ師子一滴の乳、六斛の驢乳一時に迸散す。

滄山がまた云つ、もしある人が、一切衆生、但だ忙忙たる業識有るのみにして本の據る可き無し、と問うたらどう答えるか。仰山が云つ、正面切つて学人の名を呼び、学人がはいとこたえれば、わたしは、なんだ、とたずねましよう。学人が、わかりませんと答えましよう。わたしは云います、お前さんも本の據る可き無しだ、ただ忙忙たる業識なるのみではないぞ、と。滄山が云つ、師子一滴の乳、六斛の驢乳一時に迸散す、だ。

・一切衆生但有云 南陽慧忠の伝巻二に「一切衆生、忙忙業性、無本可據、日用而不知、無由得出離於三界」という句が見える。忙は茫が正しい。業識は妄心。

滄山又た仰山に問う、身辺に學禪の僧有りや。仰山云く、還た一两个有るも只だ是れ面前背後するのみ。滄山云く、云何んが面前背後する。仰山云く、人前に声教を受持し、別人に祇對するときは即ち背後するに似たり。渠が自己照用の處を指定著するに、業性も亦た識らず。滄山云く、我が身辺還た學禪の人有りや。仰山答えて云く、出山日早し、有るも亦た他を識らし。滄山云く、汝が在日の眼目を以てすれば、且く滄山有するや。仰山答うらく、山中、縦い諸の同学の兄弟有るも曾つて子細に他と共に論量せず、並びに眼目の深淺を知らず。滄山云く、大安如何ん。答えて云く、他を知らず。全諗如何ん。亦た他を識らず。志和如何ん。亦た他を識らず。志遇如何ん。亦た他を識らず。法端如何ん。亦た識らず。滄山咄して云く、我れ汝に問うに惣に識らずと道うは什摩の意ぞ。

仰山、和尚に諮るらく、為當、他が見解を記せんことを欲得するや。為當、行解を欲得するや。滄山云く、汝、云何んが、他が見解を説き、云何んが他が行解を説かん。仰山云く、若し他が見解を記せんと欲せば、上来の五人、向後、和尚が声教を受持して、人の善知識と為りて一切の人に説示すること、之を一瓶に瀉ぎて一滴をも失わざるが如くせん。人の師と為りて餘り有り、此は是れ見解なり。滄山云く、行解如何ん。仰山云く、未だ天眼、他心を具せざれば、他が照用の處を知らず。行解は自ら清濁を辯じ、業性は意密に属するに縁る、所以に他を知らず。只だ慧寂の如きんば江西に在りし時、盡頭無慙無愧なりき。今時和尚は見了れり。喚んで

學禪人と作すや。瀉山云く、是れ我れ一切人前に向かつて、汝は禪を解し得ずと説かん、得たりや。仰山云く、慧寂是れ何の蝦蟇蝮蟻にして云何んが禪を解せん。瀉山云く、是れ汝が光明、誰人か汝を障えん。

・揩定 ある基準によつて是非曲直を定めること。

・瀉之一瓶不失一滴 涅槃經四十一「如寫瓶水置之一瓶」の語にもとづく。

・意密 三密の一。

仰山、瀉山に問うて云く、西天二十七祖般若多羅、玄かに禪宗向後三千年の事を記し、時の至ること分寸も移さざりき。只だ和尚の如きは今時還た得るや。瀉山云く、此は是れ行通辺の事なれば我れ今未だ得ず。我れは是れ理通の學にして亦た是れ通自宗なり。所以に未だ六通を具せず。仰山、瀉山に諮つて云く、只だ六祖和尚の如きは遷化に臨みし時、諸子に付属すらく、一錠錠の重さ二斤なる可きを取りて吾が頸中に安じて、然る後之を漆せよ、と。

諸子問うて曰く、鐵を頸中に安ず、復た何の意か有る。六祖云く、紙筆を將ち來たれ。吾れ之を玄記せん。五六年中、頭上に親を養い、口裏に須く喰すべし。満に遇うの難あり。楊柳、官と為らん。瀉山云く、汝は還た六祖の玄記の意を會するや。仰山云く、會す。其の事過ぎたり。瀉山云く、其の事は過ぎたりと雖則も、汝、試みに説き看よ。仰山云く、五六年中なる者は三十年なり。頭上に親を養うなる者は一孝子に遇うなり。口裏に須く喰すべき者は、數數齋を設くるなり。満に遇うの難なる者は、是れ汝州の張淨満なり。新羅の僧金大悲が錢を將つて雇うことを被り、六祖は頭を截たれ、兼ねて衣鉢を偷まれたり。楊柳、官と為るなる者は、楊は是れ韶州刺史、柳は是れ曲江縣令なり。驚覺して後、石角臺に於いて捉得せり。和尚今時此の見有りや。瀉山云く、此は是れ行通なり、我れ亦た未だ得ず。此れ亦た是れ六通の數なり。

仰山、和尚に諮るらく、和尚今時若し人の見解を記することは即ち得たり。若し人の行解を記することは即ち人情に屬して是れ佛法ならず。瀉山喜んで云く、百丈先師記するらく、十數人、佛法を會し禪を會し、向後千百の人圍遶せん、と。其れに及んで自ら數

に住するや。仰山云く、慮おそ恐らくは此くの如からん。然らば則ち聖意測ること難し。或いは逆か或いは順か慧寂の知る所に非ず。瀉山云く、汝向後還た人を記するや。仰山云く、若し記せば只だ見解を記するのみにして行解を記せじ。見解は口密に属し、行解は意密に属す。未だ曹溪に齊しからざれば敢えて人を記せじ。瀉山云く、子何が故に記せざるや。仰山云く、燃燈身前事這辺属衆生行解無憑。瀉山云く、燃燈後、汝還た渠かへを記し得るや。仰山云く、若し燃燈の後ならば他に自ら人の記する有り。亦た慧寂が記に到らざるなり。

・玄記 懸記に同じ。

・若記人行解即属人情不是佛法 七二頁の仰山の語の中に「他時自具宿命他心、三明八解、此是聖末辺事、汝莫將心湊泊。我分明向汝道、却向性海裏修行、不要三明六通。何故如此。然則有清有濁、但二俱是情。汝不見瀉山道、凡聖情盡、躄露眞性常住、事用不二、是如如佛」とあるが、人情というのは、但二俱是情の、また凡聖情盡の情にほかならないであろう。つまり仰山のこの語は右に引いた瀉山の語を、仏法として意識してのうえで云ったものである。そこで瀉山が喜んでつづく言葉を言ったのであろう。この一段全体が右に引いた瀉山の仏法を前提しているように思われる。

・及其自住數不 良く読めないが、仰山の答えから判断すると、お前さんもその十数人の中に入っているかと問っているようである。

・或逆或順 まともに云ったことなのか逆を云ったことなのか。仰山が謙遜して云った言葉であろう。

・這辺以下文に乱れがあつて読めない。

仰山又た瀉山に問う、和尚、浮漚識、近来知らず、寧やすらげるやを。瀉山云く、我れ无にし来たりて五六年を経たり。仰山云く、若し与摩ならば如今、和尚は身前に普超三昧頂に應ぜん。瀉山云く、未だし。仰山云く、性地の浮漚すら尚お寧し。燃燈身前、何が故に未だしや。瀉山云く、理は即ち此くの如しと雖然いへども、我れ亦た未だ敢えて保任せず。仰山云く、何れの處か是れ未だ敢えて保任せ

ざる處。瀉山云く、汝、口解脱すること莫れ。汝聞かずや、安秀二禪師、則天一たび試みて水に下らしむることを被りて、始めて長人有ることを知れり。這裏に到りては鐵佛も亦た須く汗流すべし。汝大いに須く修行すべし。終日、口密密底なること莫れ。

・我无來經五六年 无來は元來かも知れない。

・莫口解脱 卷十三招慶の伝に「問、無居止處、還許學人立身也無。師云、於上不足、正下有餘。學云、与摩則學人進一步也。師云、汝也莫口解脱」とある。

・安秀二禪師云 祖庭事苑卷一「入水見長人。按耀禪師錄、唐武后召高山老安、北宗神秀入禁中供養、因澡浴以宮姬給侍、獨安怡然無它。后歎曰、入水始知有長人」と見えるが、今の場合は狀況が異なる。

・口密密底 口のなかにものがびっしりとつまっている状態。すなわちしゃべりまくること。口蜜三昧をやり過ぎるな。口蜜を引き伸ばした言い方。

又た云く、汝が三生中、汝は今何れの生に在りや。實に我に向かつて説き看よ。仰山云く、想生、相生は、仰山今時すでに淡泊なり。今正に流注裏に在り。瀉山云く、若し与摩ならば汝が智眼猶お濁り、未だ法眼力を得ざるの人なり。何を以てか我が浮漚中の事を知らん。仰山云く、大和三年、和尚処分して理を究めしむるを奉じて、頓に實相の性、實際の妙理を窮め、刹那の時に當りて、身の清濁辯じ得て、理行分明たり。此れより已後、便ち師承の宗旨有ることを知れり。行理の力用卒に未だ説く可からざると雖いえども、如今、和尚得たると得ざるとは即ち知れり。海印三昧を以て印定すれば、前學後學、別に路有ること無し。瀉山云く、汝は眼目既に此くの如し。隨處に各自に修行する、所在の出家と一般なり。

・三生 人天眼目卷四、三種生「師謂仰山云、吾以鏡智為宗要、出三種生、所謂想生相生流注生。楞嚴經云、想相為塵 識情為垢。二俱遠離則汝法眼應時清明。云何不成無上知覺。想生即能思之心雜亂、相生即所思之境歷然、微細流注、俱為塵垢。若能淨盡、方得自在」。

仰山、滄山に諮つて云く、初め和尚に礼辞せし時、豈に語有りて處分せざりしか。滄山云く、語有り。云く、是れ機理なりと雖も其の事を含むこと無からず。滄山云く、汝也た是れ秦時の鐸落鑽なり。仰山云く、此の行李の處、自ら謾し得ず。滄山云く、仁子の心は亦た合に此くの如かるべし。

仰山が滄山に諮つて云う、むかし和尚さんにお別れの挨拶をした時、お言葉があつて仰せ付けられましたね。滄山が云う、そう
だ。仰山が云う、機理でありますけれどもその事を含まないのではありません。滄山が云う、お前さんも秦時の鐸落鑽だ。仰山が
云う、この行李のところは自分をいつわるわけには行きません。滄山が云う、仁子の心は当然そつある筈だ。

・ 雖是機理不無合其事 理と事とを対比させてあるのであるうけれども難解。

・ 秦時鐸落鑽 碧巖録第六則評唱に云う、「雲門初參睦州、州旋機電轉、直是難湊泊、尋常接人、纔跨門、便搗住云、道道擬
議不來、便推出云、秦時輾轉鑽」。鐸落鑽は、阿房宮を建てるときに用いた巨大な鑽。落成後は無用の長物となつた。

道存問つて曰く、滄山に礼辞せし時、何の言語か有りし。仰山云く、我れ和尚を辞せし時、処分すらく、五六年にして吾れ在りと
聞かば即ち帰り來れ。吾れ在らずと聞かば即ち自ら生路を揀びて行け。努力せよ、好く去れ、と。道存問つて云く、和尚、今時祖教
を傳持す。若し記せざれば向後学人如何せん。和尚云く、我れ分明に汝に向かつて道う、今時、人の見解を試みるも人の行解を試み
ず、と。他の經解は意密に属す。正に境に涉る時、重處に偏流し、業田に芽出づ。別人争でか知らん。何れの處にか他かれを記せん。

汝聞かずや、大耳三蔵、西天より來り、肅宗に對することを得たり。肅宗問つて云く、三蔵何の法を解するや、と。三蔵云く、善
く他心を解す、と。肅宗遂に中使をして送りにて國師忠和尚の處に到らしめ、三蔵の實に他心を解するやを試みんことを請わしむ。國
師、遂に涉境心を將もつて三蔵を試みたり。三蔵果たして心念の處を見知せり。境に涉りしが為に縁る。後、國師、三昧に入りて、心、
境に涉らず。三蔵、國師の意を覺むること得ず。呵して、野狐精、聖は何れの處にか在ると云うを被れり。若し自受用三昧に入り去

らば、玄は誰か知ることを得ん。所以に行解は知ること難し。故に云う、證する者は見知に非ず、證せざる者も見知に非ず、と。

・正涉境時云 百丈の伝に「為縦自心貧愛、所見悉變為好境、隨所見重處受生、都無自由分」とあるのを参照。

・大耳三蔵 伝灯録五慧忠國師の伝参照。

道存問うて云く、如何にせば行解と相應することを得ん。和尚云く、汝、須く禅宗第三玄を會得すべし。初心は即ち第一玄に入門せんことを責ぶ。向後の両玄は是れ得座被衣なり。汝、須く自看すべし。亦た須く自知すべし。

種智と種智と有り。種智なる者は即ち三身如一なり。亦た理無諍と云う、亦た遮那湛寂と云う。種智なる者は即ち身性圓明なることを得て、後却つて身前に向かつて照用するも染せず著せず。亦た舍那無依智と云い、亦た一躰三身と云う。即ち行無諍なり。是くの如く身性圓明なれば漏盡き意解け、身前に業無く、動靜に住せず。出生入死して接物利生す。亦た正行と云い、亦た無住車と云う。他時自ら宿命他心、三明八解を具せんも此は是れ聖末辺の事、汝、心を將つて湊泊すること莫れ。我れ分明に汝に向かつて道う、却つて性海裏に向かつて修行せよ。三明六通を要せず。何が故に此くの如きや。然らば則ち清有り濁有るも、但だ二俱に是れ情なるのみ。汝見ずや、瀉山道えり、凡聖情盡き、眞性の常住なるを躰露す。事用不二なる即ち是れ如如佛なり、と。

第三、菴陵の僧道存、和尚に問う、諸方の大家は達摩は四卷の楞伽經を將ち来ると説く。未審いぶかし、虚なりや、實なりや。仰山云く、虚なり。道存問う、云何ぞ虚なることを知る。和尚云く、達摩梁時に来る。若し經を將ち来らば、什摩の朝に在つて翻譯し、復た何の傳記に出づるや。其れ楞伽經は前後兩譯あり。第一譯は是れ宋朝求那跋摩三蔵、南海始興群に於いて譯せり。梵には質多と云い、此には數數生念と云う。又た、乾栗と云い、此には無心と云う。此れは是れ一譯なり。上の目錄に見ゆ。又た江陵新興寺截頭三蔵の譯あり。胡には質多と云い、此には數數生念と云う。胡には乾栗と云い、此には無心と云う。此れは是れ二譯なり。義は即ち一般なれども、胡云漢云は則ち差別有り。若し、達摩の經を將ち来ると言わば、具翻譯義は復た是れ何の年ぞ。又復た何の土に流行せしや。汝

聞かずや、六祖曹溪に在つて説法せし時、我に一物有り。本来無字、無頭無尾、無彼無此、無内無外、無方円、無大小、不是佛、不是物と。返つて衆僧に問う、此れは是れ何物ぞ、と。衆僧對無し。時に小師神會、出で來つて對えて云く、神會、此の物を識れり。六祖云く、この饒舌の沙弥、既に識ると云わば、喚んで什摩物と作すや。神會云く、此れは是れ諸佛の本源、亦た是れ神會が佛性なり。六祖杖を索めて沙弥を打つこと數下す。我れ汝に向かつて道えり、無名無字と。何ぞ乃ち本源佛性を安置せるや。登時、神會呼んで本源佛性と作すすら尚お杖を与つることを被る。今時、説いて達摩祖師經を將ち來ると道わば達摩を謾糊し、祖宗を滯累し、合に其の鐵棒を喫すべし。只だ佛法の如き此の土に到つて三百年、前王後帝の經論を翻譯せしこと少なかる可きこと那作摩。達摩の特に來るは、汝諸人、三乘五性の教義に貪著し、汨没して諸の義海中に在るが為なり。所以に達摩和尚、汝諸人の迷情を救う。初め此の土に到りし時、唯だ梁朝の實志禪師一人の識ること有るのみ。梁帝、實志に問つて曰く、此れは是れ何人ぞ。實志答つ、此れは是れ佛心印を傳つるの大師、觀音聖人なるか、と。楞伽經を傳つるの聖人とは云わざるなり。

・ 求那跋摩 求那跋陀羅の誤り。

道存、和尚に問つて云く、達摩五行論に云く、教を借りて宗を悟る、と。復た何の教を借るや。仰山云く、言つ所の借教悟宗とは、但だ口門を借る、言語牙齒咽喉唇吻なり。云口放光は即ち義を知るなり。悟宗とは、即ち梁帝に答えて云く、見性を功と曰い、妙用を徳と曰う。功成り徳立つは一念に在り。是の如き功德の淨智妙用は是れ世の求むるに非ず。只だ曹溪六祖の如き、天使に對えて云く、善惡都て思量する莫れ。自然に心跡に得入す。湛然常寂にして、妙用恒沙なり、と。天使頓悟し、歎じて曰く、妙盡く、故に佛性を知る。善惡を念ぜず、妙用自在なり。某甲聖人に見ゆるを待つて、与に妙旨を傳えん、と。皇帝は之を聞き、當時に頓悟し、亦た歎じて曰く、朕、京城に在つて、曾て此語を聞説せず。實に明據と為す、謹敬頂礼して修行せん、と。

・ 達摩五行論 五行は四行の誤り。

・ 道存の質問は、前段の仰山の答に満足せず、借教悟宗という如く、教を借るとは何の經を借りるのかと問うた。

・云口放光云 読めない。但借口門言語、牙齒咽喉、唇吻云云か。

・見性曰功云 梁武帝との無功德の話しを根拠としている。即ち六祖壇經に「實無功德……見性是功、平直是德、内見仏性、外行恭敬」と、功德を、二つに分けて説く。

・天使 薛簡なり。卷二惠能の章に、「欲得心要、一切善惡都莫思量、自然得入心跡、湛然常寂、妙用恒沙」という。

・待某甲若云「待」と「若」は両立せず。今、「若」を行字とする。

道存問うて曰く、達摩和尚は既に楞伽經を將ち来らず。馬大師の語本及び諸方の老宿、數々楞伽經を引く、復た何の意有りや。仰山云く、従上、相承して説くに、達摩和尚說法せし時、此の土の衆生、玄旨を信ぜざるを恐れ數數楞伽經を引き来る。經上に相似の靈有るに縁る。宗通説通もて董蒙を誘つ。「宗通」修行者及び聽惠婆羅門来つて、仏に三十六對を問うに、世尊並びに撥して世論に入る。又た相似の靈有り。縁より得る所の覺及び本住の法、金銀等の性は、如来の出世及び不出世にも、本性常住なり。故に云う、有佛無佛、性相常住なりと、の如き、此れは是れ閑暇の語話にして引き来る。是れ達摩の此を將つて祖宗の的意と為すには非ず。汝、聞かずや。達摩西天に在りし時、般若多羅に問うて云く、我れ今、法を得たり、當に何の土に往きて、化を行す可きや、と。般若多羅云く、汝は今、法を得たり、且く遠去する莫れ。吾が滅度の後六十一年を待ちて、當に震旦に往くべし。只だ一九を得んのみ。如今、便ち去かば、日下に衰ゆ、と。亦た分付せられて楞伽經を將つて此土に来るとは聞かず。我れ今、汝に告ぐ、若し禪道を學べば、直に須く穩審なるべし。若也もし原由を知らざれば妄に宗教中の事を説くことを得ず。是れ善因なりと雖も惡果を招かん。

・馬大師語本 馬祖に語録があり、「語本」と言っていた。

・宗通説通 楞伽經卷三、「一切声聞菩薩有一種通相、謂、宗通及説通」。

・聽惠婆羅門 不詳。

・三十六對 壇經に拠つたもの。

・吾滅後六十一年 卷二には六十七年という。

・日下 同く、「日下者京都也」といふ。

・只得一九 足し算で十人を言ったもの。

第四、幽州の僧思鄒問う、和尚、畢竟するに禅宗頓悟入理の門、的の意如何ん。仰山云く、此の意甚だ難し。若是他の祖宗の苗裔ならば上上の根性なり。西天の諸祖、此土従上の祖の如きは、相承くるもの或は一玄機、或は一境智、他便ち肯い去りて玄に自理を得、惑地に居らず、更に文教に随わず。故に相傳えて云く、諸佛の理論は文墨に干わらず、と。此の一根の人は得難し。汝に向かつて道う、有ること少し、と。學禅の師僧、何れの處にか佛法を得ざること有る。只だ志無きが為めなり。汝聞かずや、先徳道く、若し安禅靜慮せざれば、這裏に到つて惣に須く忙然たるべし、と。

思鄒問うて云く、此の一格を除きて、別に更に入處有りや。仰山云く、有り。如何なるか即ち是。仰山云く、汝は是れ何處の人ぞ。思鄒云く、幽燕の人なり。仰山云く、汝は還た彼の處を思つや。答えて云く、思つ。仰山云く、彼の處は是れ境、思は是れ汝が心。如今、今の思つ底を返思せよ、還た彼の處有りや。答えて云く、這裏に到りては但だ彼の處のみに非ず、一切悉く無し。仰山云く、汝が見解には猶お心境の在る有り。信位は即ち是なるも、人位は即ち是ならず。

思鄒問う、這裏を除却して別に更に意旨有りや。仰山云く、有を別ち無を別たば即ち安んぜざるなり。思鄒問う、這裏に到りて作摩生ならば即ち是ならん。仰山云く、汝が解處に據れば、還た一玄を得て得坐被衣せん。向後自看せよ。汝聞かずや、六祖云く、道は心に由りて悟る、と。亦た云く、心を悟る、と。又た云く、善悪都べて思量すること莫くんば自然に入ることを得て、心跡湛然として常寂にして妙用恒沙ならん、と。若し實に此くの如くんば、善く自ら保任せよ。故に云く、諸佛護念す、と。若し有漏にして意根を忘せざれば、憶想の身前義海に在れば五陰身の所攝を被らん。他の時自ら奈何んともせざらん。故に云く、象の深泥に溺るるが如し、と。並びに禅を見ず。亦た師子兒に非ざるなり。

・若是他祖宗苗裔 原文は若見^云。見を是に改める。

・諸佛理論不干文墨 六祖の言。伝灯録五参照。

・若不安禅静慮、到这裏惣須忙然 卷十四大珠慧海の伝にも見える語。のち坐禅儀に引かれる。

・道由心悟 伝灯録五の六祖の伝参照。

第五、海東の僧亭育問う、和尚が禅決名幽、措く所を知らず、仰山集雲峯、迦葉弥伽、舍那、遮那、三摩鉢底、師地、静慮、沙門慧寂。和尚云く、仰山集雲峯なる者は即ち是れ盧舎那本身及び現在の業根分段身の招く所の外依報なり。亦た僧寶住持の處所と云う。迦葉弥伽なる者は、惣なり。迦葉なる者は禅宗の初祖にして婆迦婆の處より密に三昧を傳えたり。故に弥伽と云うなり。舍摩なる者は密受三昧なり。

亭育問う、和尚が禅決中に云く、我に本来の面目を還せ、と。是れ此の三昧なること莫きや。仰山云く、若し是れ汝が面目ならば、更に我をして説かしめよ、石上に花を栽つるが如く、亦た夜中の樹影の如し、と。問うて云く、夜中の樹は決定して有ることを信ずるも、其の樹影は有と為すや無と為すや。仰山云く、有無は且らく置く、汝、今、樹を見るや。

遮那なる者は身性如なり。三摩鉢底なる者は即ち戒定慧なり。亦た菩提の妙花と云い、亦た花蔵莊嚴と云う、即ち内依報なり。外果を招く者は即ち人相成佛是なり。師地なる者は通自宗、自宗通にして即ち三十三祖なり。静慮なる者は即ち四種無受三昧なり。

問う、此の三昧には出入有りや。仰山云く、有病ならば即ち出入有り、無病ならば薬還た袂る。初心は即ち出入を學び、熟根は即ち淨明無住なり。

問う、出入は其の意如何ん。仰山云く、人如無受に入るときは即ち法眼三昧にして、起つときは外取受を離る。性如無受に入るときは即ち佛眼三昧にして、起てば即ち内取受を離る。一躰如無受に入るときは即ち智眼三昧にして、起てば即ち中間取受を離る。亦た不著無取受と云う。上来所解の三昧に入りてより一切悉く空なり。即ち慧眼の起す所なり。無無三昧に入ること即ち道眼の起こ

す所にして即ち玄通無碍なり。譬えば虚空の如し。諸眼立たざれば絶えて眼翳無し。如上の三昧は畢竟清浄にして依住無し、即ち浄明三昧なり。

諸の學人に告ぐ、勤めて精進し、懈怠懶墮し、空心静坐し、一个の無念無生を想い、一个の無思無心を想うこと莫れ。他の身前不生不滅なる二辺中道の義海を論ずれば、是れ他人の光影なり。身前義海を抛却し、緊く一个の黒山を抱執する、此は是れ癡界なり、亦た是れ禅らなず。

沙門なる者は、本性に達し、縁慮を息め、勤めて上来の三昧を修す。則ち一切三昧に通達す、故に沙門と云う。天人阿修羅頂戴恭敬す。故に云う、道德圓備す、と。此れを執れば向後人天の供養を受くるに堪えん。若し此くの如く修行せざれば人天の供養を受けて一生空しく過ごさん。大難大難。惠寂なる者は住持三寶中に在り。初解の与よに外に依報を招くと別ならず。並びに假名空に属す。

自餘の法要及び化縁の事、多く仰山の行録あんろくに備う。勅謚智通大師妙化の塔。東平に遷化し、後仰山に歸る。

・ 舍那遮那 舍摩遮那ならん。

・ 絶無眼翳讚如上三昧 讚は衍ならん。

祖堂集卷第十八

